

【論 文】

資料・研究動向にみられるハンセン病療養所楽生院

城 本 る み

1. はじめに
2. 植民地時代のハンセン病問題（資料篇）
3. 戦後のハンセン病問題（研究動向篇）
4. ハンセン病問題と楽生院
5. おわりに

1. はじめに

台湾のハンセン病¹療養所楽生院に関する前回の論考において、筆者は楽生院が設立された時代的背景について、日本ですでに発表されている著書、学術論文、資料集を中心に整理した²。そのなかで筆者は植民地時代の台湾におけるハンセン病政策の特徴について、「楽生院開設が決定されるまで、台湾総督府は腺ペストやマラリアといった感染症対策を中心に衛生事業を展開し、台湾領有当初はハンセン病対策に力をいれていたわけではない。また楽生院開設にあたっては、世界的なハンセン病政策、すなわち外来治療を中心とする流れを取り入れようとする動きもみられ、決してはじめから強制隔離主義一辺倒であったわけではなく、その点で他の旧植民地・占領地域とは異なる台湾独自の展開があった」とまとめ、楽生院はそうした背景の中で設立されたと総括した³。

この論考では台湾総督府の設置から楽生院開設まで35年の歳月が流れたこと、それまでは外国人宣教師が台湾におけるハンセン病治療の中心を担い、楽生院開設後も彼らが相応の影響力を保っていたこと、開設にいたるまでの1920年代には強制隔離主義と治療解放主義との相克があったこと、楽生院院長上川豊の経歴や外来診療の継続などから、台湾におけるハンセン病政策が内地とは必ずしも一致しなかったのではないかと提起したが、こうした総括は基本的に限られた先行研

¹ 本稿では引用する原文中に「らい」または「癩」という言葉・表記が使っているものについては、時代的背景も考慮し、そのままの表記にとどめることとする。

² 城本るみ（2011）「台湾のハンセン病政策に関する覚書き～楽生療養院設立の時代的背景～」弘前大学人文学部『人文社会論叢』（社会科学篇）第26号 pp.101-124

³ 城本（2011）前掲論文 p.121

究⁴によるところが大きい。また平田（2009）の「当時の日本国内にも隔離主義と治療解放主義との二重構造が形成・展開され、結果的に絶対隔離主義が展開され、治療解放主義を否定・抑圧した二重の誤りを犯した歴史ではないか」という指摘⁵については、不十分ながら和泉（2005）や筋（2011）などを引用し、日本国内での相克があった点についても触れ、さらに上川が治療解放主義から隔離主義へと変節したといわれている点についても筆者なりに若干の検討を行っている⁶。

先の論考でもふれたように植民地時代の台湾におけるハンセン病問題に関する資料としては、すでに近現代資料刊行会による『植民地社会事業関係資料集（台湾編）』（2001）や不二出版『近現代日本ハンセン病問題資料集成 補巻7』（2007）などが刊行され、日弁連の『ハンセン病問題に関する検証会議 最終報告書（上・下）』（2007）にも植民地における日本のハンセン病政策についてまとめた部分がみられる。劉（2001）は「日本統治期台湾の衛生基準と衛生政策はみな同じ一群の専門家の手によるものなので、官側の資料によって植民地時代の衛生事業への貢献を解釈するよりも、なぜ日本統治期の衛生政策が予定した目標を達成したのかを議論するほうが意義がある」⁷と述べているが、筆者は植民地時代については、この時期の医事衛生について日本人医療者が書いた書物や当時の新聞資料の中にそのヒントがみられるのではないかと考えている。

本稿では前回の論考からさらに進めて、ハンセン病療養所楽生院が台湾において過去どのように扱われてきたか、そして現在それがどのような形に変容しているのかについて明らかにしていきたい。そのため本稿では前述した資料集で扱われてこなかった文献をとりあげ、ハンセン病や楽生院の社会的な位置づけを考察していく。植民地時代については、当時の医事衛生について日本人がまとめた書物のなかからこの問題に関連する記録を拾う作業から始める。また台湾人によって編集されていた当時の新聞《臺灣民報》を資料として医事衛生記事から関連資料をひろい、こうした日本人、台湾人双方の資料のなかで、ハンセン病や楽生院がどのように扱われてきたかという点について比較検討する。また戦後の台湾においてハンセン病や楽生院をキーワードとする学術研究がどのような傾向にあるのかを調べ、その研究動向を把握することからハンセン病問題や楽生院が台湾で研究課題としてどのように扱われているかを考察し、今後の台湾におけるハンセン病療養所のありかたについて検討していくための一助としたい。

⁴ 植民地時代の台湾におけるハンセン病政策に関する日本の学術研究はかなり限られている。前回の論考では、台湾の医事衛生に関しては飯島（2000）、ハンセン病政策については清水（2001）、平田（2009）、藤野（2010）を、またハンセン病と宣教師に関しては芹澤（2007）等を中心に整理した。また台湾における研究については范燕秋（2009）、王文基（2003）を中心に整理した。

⁵ 平田勝政（2009）「1920年代の台湾におけるハンセン病問題に関する研究」（『研究論文集—教育系・文系の九州地区国立大学間連携論文集—2009, vol.2, no.2』）【追記】

⁶ 城本（2011）前掲論文 pp.113-114、pp.118-121

⁷ 劉士永（2001）「台湾における植民地医学の形成とその特質」（見市雅俊他編『疾病・開発・帝国医療』東京大学出版会）p.244

2. 植民地時代のハンセン病問題（資料篇）

日本の領有以前の台湾医学は、布教活動のために渡台していた宣教師によって担われているところが大きかったと言われる。当時の台湾には民間でよく訓練された医療者が欠乏⁸しており、その社会的地位も低かった⁹。

台湾総督府に民政長官として赴任した後藤新平は、台湾を統治するにあたって「医者や宣教師の代わりに使おう」と述べ、もともと衛生官だった後藤は欧米とは異なり宗教ではなく医学の普及によって台湾の統治を目指し、衛生事業に力を注いだ。そのため植民地統治の重要な施策として台湾に医事衛生の知識を普及するとともに、医療機関を充実するため要所ごとに病院をつくり、根本的には医学校を設立して医師を養成すべきであるという構想をもっていた¹⁰。

台湾領有初期の日本は腺ペスト対策に追われ、その15年後の1910年代からはマラリア防遏対策を衛生行政の中心にすえている。飯島（2000）は「近代日本の植民地主義は、医療・衛生事業に明確に政治性をもたせた」と述べ、「台湾総督府は、腺ペスト対策やマラリア防遏対策を通じて、台湾人社会への植民地権力の浸透をはかることに成功」し、「台湾における近代日本の「帝国医療」は、日本の台湾植民地統治政策の中心に位置した」¹¹と考察しており、それは「後藤新平という強烈な個性によって開かれた路線」であるとも述べている。

本節では、2-1.でこれまでに植民地時代の記録として日本人が著した代表的なものを数点とりあげ、そのなかでこの時代のハンセン病政策や楽生院がどのように扱われているかをみていく。2-2.では植民地時代に台湾人によって刊行されていた《臺灣民報》の医事衛生関連の記事から、ハンセン病、楽生院に関するものを抽出する。そして2-3.では台湾・日本双方ですでに出版されている楽生院に関する文献をとりあげ、宣教師の伝記における楽生院記事をとりあげる。

2-1. 日本人の著した植民地時代の医事衛生

『台湾医学五十年』は、昭和9（1934）年、台北帝国大学医学部創設準備のため台湾に赴任した小田俊郎が昭和49（1974）年に植民地台湾での医事をまとめて出版したもの¹²で、その後台湾で中国語に翻訳され、台湾医学史のなかでも引用されることが多い書物である。この著作について特筆すべきことは、明治28（1895）年の台湾領有時からの医事をまとめてあるにも関わらず、昭和5

⁸ 劉士永（2001）前掲論文p.244

⁹ そのため国語伝習所で日本語を習得させ、その中から医学志望者を募ろうとしても、通訳のほうが高給であるため開設当初は医学講習所の生徒がなかなか集まらなかったといわれる。堀内次雄は「日本人でこそ、医者といえば立派な職業なのだが、当時の台湾人は医者を見下して見ている」と述べている（鶴見祐輔『正伝・後藤新平3』pp.439-440）

¹⁰ 小田俊郎（1974）『台湾医学五十年』（医学書院）p.14

¹¹ 飯島渉（2000）「日本の台湾統治と腺ペスト・マラリア」（『ペストと近代中国』研文出版）pp.125-126

¹² 小田滋（2010）『増補版 堀内・小田家三代百年の台湾』pp.26-28

(1930)年に設立されたハンセン病療養所楽生院については一言も書かれておらず、初代院長として赴任した上川豊の名前もまったく登場しないことである。

領有初期の日本がペストやマラリアなどの防遏に苦勞したこと、また日本の医学界も総督府に協力し、これらといかに闘ったかについての記述はあるが、ハンセン病については「台湾にはペスト、腸チフス、赤痢、コレラ、天然痘、流行性脳脊髄膜炎、マラリア、恙虫病など急性伝染病の他に、種々な寄生虫病、蛇毒などがあり、結核、癩、梅毒、精神病が蔓延し、種々な皮膚病、地方病性甲状腺腫が各地にみられた」という記述の中に「癩」という言葉が出てくるのみ¹³である。

この本は植民地時代の台湾の医学界事情をよくあらわしており、当時の台湾における医学教育や台北医学専門学校、台北帝大医学部に関する人事を中心とする記述が多くみられる。小田は台北帝大医学部の設置準備のため内科筆頭臨床教授就任予定者として赴任しているが、当時の台湾医学界では急性伝染病の克服が急務の課題であり、そのための研究に主眼がおかれ、ハンセン病への関心や注目度が低かったことがわかる。

丸山芳登の『日本領時代に遺した台湾の医事衛生業績』は、明治41(1908)年から昭和22(1947)年まで足掛け40年を台湾で過ごした丸山¹⁴が、昭和32(1957)年に日本領有時代の医事衛生の変遷や研究文献を収録したもの¹⁵である。この書物は1970年以前の台湾医学史における重要文献とされ、序編で台湾の地勢と気候について述べ、全体は人口編、疾病編、施設編の3部で構成されている。疾病編(31~106頁)は法定伝染病、特殊疾患、その他の3章から成っているが、このなかにハンセン病について書かれている部分は見当たらない。ハンセン病に関連するのは施設編(108~125頁)の第4章医療機関のなかの最後の第7項「特殊診療機関」部分である。

この特殊診療機関でとりあげられているのは(イ)伝染病院(ロ)結核療養所(ハ)癩療養所(ニ)精神病院(ホ)婦人病院(ヘ)阿片癮者矯正所の6機関であり、癩療養所は3番目にとりあげられている。記載されている内容は、おそらく清朝領有以後であろうとしながらも、この病気の台湾への侵入時期は不明であること、日本領有以前の台湾においては1736年に彰化養濟院(定員46人)が設置され、明治28(1896)年まで160年間にわたり台湾唯一の療養所であったことがまず述べられている。日本領有後に関しては「昭和15年末の調査によると、全島に存する本病患者数は886人で人口^マ万に付き1.48の比率となり、わが国及朝鮮などの調査に較べて少ないが、この調査は警官の行うたものであるから、専門医の検診が徹底すれば恐らく1,200人位存在するだろうといわれている。然るに療養施設としては外国人医師が布教の傍ら取り扱っていた一、二の小規模な診療所あるのみであったので、総督府は昭和2年より癩療養所設立の積極的計画^マを樹て、昭和5年9月29日勅令第183号を以て台湾癩療養所官制を公布し、同年12月台北州新莊郡の丘上に療養所楽生院

¹³ 小田俊郎(1974)前掲書p.31

¹⁴ 丸山は当初台湾総督府医学研究所技手として赴任し、その後1919年10月から総督府附設医学専門学校助教授を兼任して教職に就き、1923年同校教授に昇任している。

¹⁵ 丸山芳登(1957)『日本領時代に遺した台湾の医事衛生業績』自序部分

の竣成式を挙行した。本院第一期工事の病床数は100床に過ぎなかったが、その後漸次増築拡張して年々病床を増加し、昭和16年末の現在収容患者716人に達している」と言及している。

楽生院の記述のあとに、「私立馬偕医院長英人テラー氏」による楽山園についても6行ほど記述があり、設立にあたって総督府からの助成金があったこと、昭和4年以降患者費の一部を総督府が補助してきたことが明記されていることも特筆すべき点であろう。最後に貞明皇太后による皇室の「御仁慈」と癩予防協会、癩予防法についての記載で終わっている¹⁶。

矢内原忠雄の『帝国主義下の台湾』(1929)は、「日本社会科学の古典の一つ」と呼ばれ、中国や台湾でも翻訳されて読み継がれている書物である。矢内原は新渡戸稲造のあとを継ぐ形で1920年に東大に着任、留学後1923年から東京帝国大学経済学部の「植民政策」講座を担当、この書物はその6年後の1929年、矢内原36歳のときに岩波書店から刊行された。当時の台湾総督府から発禁（日本からの移入禁止）処分を受けたが、当時の社会情勢において「新たな社会科学的な地域研究を懐胎したもの」、あるいは「台湾経済分析の高峰」として現在も評価されている¹⁷。

台湾の植民地時代における医事衛生に関しては、第3章「教育問題」¹⁸の中に附記されている。矢内原は「領台後二十五年間の台湾統治の精力は大部分が経済に集注せられ、教育は重要視せられざりしを知る。国語教育と医学、之れ台湾統治の実用上許容せられたる教育の全部であった」と述べている。また通常、植民地教育の基礎と言われる技術的教育も行われず、本島人に対する教育年限や程度が内地人学校よりも低く抑えられたことをあげ、「本島人は内地人と教育系統を異にし、教科程度は低く、内地人の手足たるべき地位が制度の上にも残存した」ことを指摘している¹⁹。また矢内原は台湾における植民地教育がインド的で、「原住民の初等教育よりも高等教育を重んずることが通例にして、之れ統治の助手を養成すると同時に一般庶民を愚ならしめ、以て統治の便宜を計るの策」をとり、大正8年までの唯一の高等教育機関であった医学校が専ら本島人に占められていたことをあげている。

さらに台湾的特徴として、「大正11年迄は本島人の教育程度を低からしむることによりて内地人を指導者の支配的地位に置かんとしたが、(大正11年の新教育令以後は)本島人の高等教育参加そのものを制度上平等となすことによりて事実上甚しく制限し、之によりて内地人の支配的地位を一層確保した」点をあげ、その例として台北帝国大学が主として内地人学生に占められていたことを対比させて挙げている²⁰。これらの指摘は医学校と台北帝国大学を対比するまでもなく、植民者としての台湾総督府の考え方を端的にあらわすものといえるであろう。

衛生行政については、台湾総督府が「ペストやマラリア等の悪疫を減じ、内地人の渡来居住を容

¹⁶ 丸山芳登 (1957) 前掲書 p.117

¹⁷ 若林正文 (2001) 『矢内原忠雄「帝国主義下の台湾」精読』(岩波書店) 解説 pp.337-383、隅谷三喜男 (1988) 「矢内原忠雄『帝国主義下の台湾』(岩波書店)」解説 pp.285-303

¹⁸ 矢内原忠雄 (1988) 『帝国主義下の台湾』(岩波書店) pp.154-170

¹⁹ 矢内原前掲書 pp.154-156

²⁰ 矢内原前掲書 pp.158-159

易にし、本島人の衛生状態を改善した」と述べつつ、本島人と内地人の死亡率の違いに言及している。また「台湾衛生政策上もっとも有名なもの」として「阿片問題」をとりあげ、明治30年の阿片令公布とそれに関する統計をあげ、領台当初と社会的事情が異なるので、阿片問題は秘密吸食者の取締を厳重にし、禁煙促進の政策を実行すべきだと提言しているが、ハンセン病政策や楽生院に関する記述は見当たらない²¹。

鶴見祐輔の『後藤新平傳』臺灣統治篇上・下（1943）では、下巻の「第一章 文化的臺灣の建設」の「四、衛生設備の完成」pp.20-33と「一〇、臺灣中央研究所」pp.77-79に医事衛生に関する記述がみられる²²。鶴見は後藤新平の娘婿であり、官僚から1928年に衆議院議員となり、1920年代後半から1930年代にかけて日米間の民間外交に貢献した人物である。義父にあたる後藤新平については1929年から伝記を出版している²³。

後藤は台湾の衛生制度については、阿片専売によって得た利益を特別会計として衛生事業の発展を計る考えがあったが実現できなかったため、魚菜市场や屠畜場を基礎として「公共衛生費」を捻出することを考えた。この公共費によって台湾のいたるところに下水ができ、ペストやマラリア、熱帯赤痢、コレラなどの予防に使う伝染病予防費も乏しかった総督府にとって、この公共衛生費の働きは大きかったという。後藤はその手腕を発揮し、内地よりもはやく上下水道の完備をとげたが、衛生制度の完成を目指すにあたって、その実施者たるべき衛生官の欠乏を克服するために台湾に学校を設立し公医制度を採用した。公医には診療のほか衛生行政にも参加させ、文化の指導者として各地に送り、各地の衛生状態を向上させたという。

鶴見は「台湾の衛生制度完成の原動力となったのは、医学校であった」と述べ、台湾医学校の設立と公医制度については項目をたてて叙述している。またこれを後藤の大きな衛生事業の柱であったと解釈し、衛生状態の改善と瘴癘の地でなくなったことを衛生事業の業績としてとらえ、後藤が大正元（1912）年に台湾を視察した際の台湾日日新報の「医事衛生的一切の施設は台湾統治の根本的解決を得たる基礎なり」という記事を取りあげている。後藤が台湾で仕事をしたのは1898~1906年であるから、まだ総督府がペストやマラリア対策に追われていた時期である。あたりまえなのかもしれないが、医師であった後藤にもハンセン病対策に関する認識はなかったようで、後藤の記録の中にハンセン病に関する記述はみあたらなかった²⁴。

²¹ 矢内原前掲書 pp.166-168

²² 鶴見祐輔（1943）『後藤新平傳』臺灣統治篇上・下（太平洋協會出版部）。原版のまま再刊された鶴見祐輔（1965）『後藤新平』第2巻（勁草書房）では「第六節 文化的臺灣の建設」の「四、衛生設備の完成」pp.361-372、「一〇、臺灣中央研究所」pp.406-409にあたる。2000年代になり、後藤の生誕150周年記念企画として現代語訳で復刊された鶴見祐輔（2005）『正伝・後藤新平3』台湾時代（藤原書店）ではpp.431-442、pp.485-488にあたる。

²³ 鶴見祐輔（1929）『人としての後藤新平』（中央公論社）、鶴見祐輔（1937~1938）『後藤新平』全4巻（後藤新平伯傳記編纂會）

²⁴ 杵淵義房（1940）『臺灣社会事業史』では、「本島の養濟院」（pp.50-55）、「癩及結核の迷信的療法」（pp.265-268）、「救療機関」（pp.271-273）において「癩」に関する部分的な記述がみられる。台湾における社会事業史として著名な書物であるが、本稿では別扱いとした。大友昌子（2007）『帝国日本の植民地社会事業政策研究』には、社

2-2. 台湾人の著した植民地時代の医事衛生～《臺灣民報》から

それではこの時代の新聞におけるハンセン病の扱いはどうなっているだろうか。平田は2009年の論考で《臺灣日日新報》(1919～1930年)におけるハンセン病問題関係記事目録を作成している。作業の結果、平田は1920年代以降の台湾における隔離主義と治療解放主義の相克を指摘すると同時に、この1920年代における相克が台湾だけの特殊性であったわけではないと述べ、当時の日本にも絶対強制隔離と治療解放主義の二重構造が形成・展開されていたことに視点をおいて研究を進めている²⁵。

本稿では資料として《臺灣民報》をとりあげる。日本統治期の台湾において発行された新聞には《臺灣日日新報》、《民族臺灣》、《臺灣民報》、《三六九小報》等があるが、発行期間が長く内容量が多かったのは《臺灣日日新報》であり、これに次ぐのが《臺灣民報》である。この2大新聞のおおきな違いは、《臺灣日日新報》が日本人によって設立された新聞であり、《臺灣民報》が台湾人によって創刊されたものだけということである。

《臺灣民報》は大正12(1923)年に創刊された。前身は《臺灣青年》という雑誌で大正9(1920)年に発行されており、その後《臺灣》と名前を変えている。当時は日本語、中国語の両方が使用されていたが、《臺灣民報》となってからは中国語表記に統一された。したがって、《臺灣青年》、《臺灣》、《臺灣民報》と名称が変わり、昭和5(1930)年に《臺灣新民報》と改称している。発刊も隔週刊から半年後には季刊となり、大正14(1925)年に週刊、昭和7(1932)年4月から日刊へとスタイルを変えた。創刊当時の発行地は東京だったが、週刊になった大正14(1925)年に台湾に支局を置き、台湾人の発言の場を提供してきた。台湾での発行が総督府に許されたのは、日本語版を発行するという条件付きだったといわれている。

昭和12(1937)年、日中戦争が勃発してから中国語版《臺灣新民報》は発禁となり、1941年に《興南新聞》と改名を迫られた。戦時統制下の1944年に《臺灣日日新報》、《臺灣新聞》、《臺灣日報》、《東臺灣新聞》、《高雄新報》の5社との合併を迫られ、《臺灣民報》は雑誌刊行から25年で幕を閉じた。この新聞は日本統治期の台湾における重要な刊行物であり、婁子匡(1907-2005)が中心となって資料を収集し、1973～1974年にかけて東方文化書局から復刊本を出している。筆者はこの「景印中國期刊五十種」を底本として鄭志敏が整理した『日治時期〈臺灣民報〉醫藥衛生史料輯録』(2004)を入手したので、これを資料としてとりあげる²⁶。

《臺灣民報》は、1920年代から30年代にかけて、台湾での社会運動に大きな影響力をもった新聞であったと評されている。台湾における社会運動を支持し、新しい知識や思想を紹介するなど、自

会事業協会との関連で楽生院の建設と楽生院内の方面寮建設の記事が2行記載されているのみである (p.207)。

²⁵ 平田前掲論文【追記】。平田は芹澤(2007)論文における清水(2001)論文や清水・平田(2005)解説論文の解釈を否定し、芹澤の1920年代台湾における治療解放主義の流れを日本国内の隔離主義と対峙する「台湾の特殊性」とする解釈に疑義をとえ、当時の日本国内にも同じような二重構造があったことを指摘している。

²⁶ 鄭志敏(2004)『日治時期《臺灣民報》醫藥衛生史料輯録』(國立中國醫藥研究所)

治要求等の世論形成に影響を与えたといわれる。鄭は《臺灣民報》は発刊以来、台湾人の観点を発する唯一の言論機関であったと述べ、日本統治時代には他にも新聞はあったが、報道や言論の公正さと台湾人が率直に意見表明できた度合いからみて、《臺灣民報》はこの時期の台湾人にとってもっとも重要な刊行物だったと評価している²⁷。しかし統治者による言論統制下において黒塗りや削除部分、発刊差し止めなども少なくはなかったため、現在当時の全文を目にすることは困難を極める²⁸。東方書局が復刊したのは日刊に移行する前の部分であるが、復刊された10年あまりの部分については、《臺灣民報》25年のなかでも重要な部分であると述べられており、鄭は復刊された資料をもとに2年近くの年月をかけて医薬衛生部分を整理編集し、652頁の大著にまとめている。

この資料集には、《臺灣青年》9本、《臺灣》12本、《臺灣民報》569本、《臺灣新民報》432本、合計1022本の医薬衛生記事が収録されている。記事内容の長短はあるが、収録されている記事のほとんどが中国語で書かれており、日本語記事はわずかしかない。内容をみると、非常に顕著なのはアヘンに関する記事の多さである。コラムなどの場合は目次からは内容がわからないものもあるので、内容がアヘンに関連しているものを筆者が抽出して数えたところ、《臺灣青年》は9本中0本、《臺灣》は12本中1本、《臺灣民報》では569本中143本（25.1%）、《臺灣新民報》では432本中84本（19.4%）であった。

鄭は自序において資料集の内容を大きく4つに分類している。鄭の分類に沿って、その内容を大まかに整理すると以下ようになる²⁹。

大別した記事内容の第1はアヘン問題に関する報道と論評である。アヘンは現代社会において憎むべき悪とされているが、日本の統治者が台湾で近代的医療制度の実施にあたり、主要な媒介として利用したのものである。ここには複雑な問題が絡んでおり、総督府の統治方針やその財政戦略、台湾人の惰性的民族性や中毒治療に関する医学界と政治問題など日本領有期50年におよぶ一大問題でもあった。台湾においてもこの問題に関しては学位論文にとどまらず豊富な研究がおこなわれているが、どれも日本の官側が遺した資料分析に偏っているきらいがあり、当時の台湾社会におけるアヘンの役割については《臺灣民報》などの解説は有益な史料となるものと思われる。

第2は日本人の公共衛生制度の実施と台湾人がこれを受容していくにあたっての不満に関する内容である。日本は公共衛生制度を台湾に導入し、これを効率的に定着させていくために警察を利用し、これまで多くの日本統治期の医療史研究者が官による統計数字を利用して、台湾人の衛生習慣ならびに疾病伝染率と死亡率が改善されたことを述べているが、《臺灣民報》の記事には日本人と台湾人の間における差別待遇と警察による横暴な強制による台湾人の悲哀や辛酸が語られている。

²⁷ 鄭志敏前掲書 自序v-vi

²⁸ 中島利郎編（2000）『台湾民報・台湾新民報』総合目録1・2（緑蔭書房）には昭和8（1933）年の『台湾新民報』所載の社説は付録として原文が掲載されているが、それ以外は目録のみで内容を確認することはできない。中島の底本も東方文化書局の影印本である。

²⁹ 鄭志敏前掲書 自序vi-viii 以下の4分類の内容部分は、筆者が鄭の自序を意識し、その意図に沿ってまとめたものであり、鄭独自の解釈が含まれている。

これらは学界がこれまで軽視してきた部分であり、こうした資料が今後の日本人の医薬行政における台湾統治業績の新たな展望を開くことになるかもしれない。

第3は病院組織と病院スタッフによる台湾人に対する偏見に関する記事である。これまで台湾社会における病院の役割に関する研究はほとんどみられず、病院は謎のベールに包まれたものとして扱われてきた。しかし《臺灣民報》においては、日本統治期の台湾人と官立病院、私立病院の間におこった問題やそれに対する批判などが多く、長期にわたって台湾の光とされてきた馬偕病院や彰化基督教病院にも台湾人を甚だ不快にする記録があり、こうした資料は台湾人の病院や医療機関の受診に関する不満を理解する一助となりうる。病院のみならず、医師、薬剤師、看護師、産婆等のスタッフも例外ではなく、多くの人が当時の医者と患者の関係は今日まで良好であり、医学界の模範となるべきものであったと思っている。しかしこの資料をみる限り、それとはまったく逆の光景がみられ、医師やその道徳観には批判が多く、今日とは較べようもないものであることがわかる。医師や医療スタッフは自ら発言する機会はほとんどなかったのであり、なおのこと彼らに関する報道は貴重である。

第4は医薬衛生に関する専門論文において展開される台湾人の医療観念であり、これもまた魅力的な資料である。医師は日本統治期の台湾における中核となった人材であり、《臺灣民報》の幹部にも医師が多い。そのためこの新聞は新しい医学教育を受けた医師の手による記事そのものによって、台湾民衆が現代の医薬衛生観念を受け入れるためのひとつの橋渡しの役割を果たしたものであるだろう。これら専門医師の執筆したコラムや論文は台湾人の医療観念が近代化の過程においてどのように変容していったのか、またその変容がどのように台湾人の受診行動を変えたかにつながっている。台湾人は薬を飲むのは好きなのに、なぜ医師にみてもらおうとしないのか、漢方医や漢方薬が西洋医学におされる中で、なぜ台湾人に好まれ信奉されるのかは、この資料のなかに答えが見つけれられるかもしれない³⁰。

こうしたまとめ部分からも《臺灣民報》が《臺灣日日新報》とは異なるスタンスで編集されており、発禁処分を受けることもあったという事実を窺い知ることができよう。

《臺灣民報》におけるハンセン病と楽生院に触れた記事の内容

この資料集にとりあげられているのは大正9(1920)年から昭和7(1932)年の12年間にわたる《臺灣民報》中の医事衛生関連1022本の記事である。先述したように、この期間は《臺灣民報》が台湾社会に大きな影響力をもっていた時期でもある。そのなかでハンセン病や楽生院に関する記事はわずか3本しかなかった。記事はすべて中国語であるため、意識しておく。

³⁰ この資料集のなかで、鄭は医薬品広告に関しては割愛している。当時の新聞紙面における医薬品広告は台湾人の服薬文化のみならず、医療受診傾向や一部の医師や病院に関する貴重な記録になった部分が多いと考えられるが、紙幅の関係により割愛せざるを得なかったという。鄭はいずれ植民地時代の医薬品広告と台湾人の医療観念に関する別稿を執筆する準備があると述べているので、それを待ちたい。

1 本目は昭和5（1930）年12月20日付、第344号の「癩病の撲滅機関楽生院開設さる。入院治療一切無料」というタイトル記事³¹である。

台湾総督府はこのたび癩病患者のために、癩療養所国立楽生院を開設した。所在地は台北州新庄街頂坡角であり、台北市の西方約20華里で乗合自動車の便がある。聴くところによると当該院の建設費は33万円、昨年3月に着工、本年3月竣工となった。12日午後2時に当該院の落成式および開院式がとりおこなわれた。来賓は石塚総督、州知事、帝大総長、医専校長ほか200余名の官民が出席した。式典は順調に進み、3時頃には閉会となり、式典後には祝賀会及び院内施設見学が行われ、6時頃散会となった。

台湾癩病患者の分布状況と楽生院入院ならびに受診手続き等は以下の通りである。

昭和5年の警務局の全島癩病患者調査による分布状況は、台北州456人、新竹州55人、台中州81人、台南州303人、高雄州103人、花蓮港庁13人、台東庁19人、澎湖庁54人である。

（楽生院受診者内規）

1. 楽生院は患者症状の軽重により入院と外来の2部に分け、すべて無料で救護療養を行う。
2. 本院の入院あるいは外来受診の患者は島内在住者もしくは台湾在籍の癩患者に限り、楽生院長による所定の受診手続きを経るものとする。
3. 受診手続きは2種類
 - (1) 警察署長あるいは街庄長による病院への送致書を携帯している者
 - (2) 自分の戸籍抄本を携帯し院へ出願する者
4. 一旦入院した患者は退院や外出は厳禁とされるが、病症が軽快あるいはやむを得ない事情に依る場合は院長の許可を得、一定の規則を遵守する場合はこの限りではない。

外来患者の診療について、当該院の見解は次の通りである。癩病の治療については、その病気の発症時に適切な治療を受けることが最も大事であると考えるので、この理由により初期の軽症者は外来診療による治療とし、病症が深刻な者も臨床検査結果により癩菌を社会に撒き散らさないことがわかれば、外来診療の受診を認めるものとする。

2 本目は昭和6（1931）年2月7日付、第350号記事³²である。これは各地の状況が「地方通信」欄に紹介されているもので、そのなかの「臺北」部分で「楽生院の癩患者、受け入れがたい待遇」と題し、次のように書いている。

総督府が経営する癩療養所楽生院は開設以来まだ日も浅いが、入院患者に聴くと不満がたえない。もっとも苦痛を感じるのは食事であり、院で供される食事は三食とも日本人による某所が請け負っており、食事内容もすべて日本式、主食の米も日本人が使用するような小さな茶碗一杯に過ぎないため、患者たちはいつも空腹を抱えているというのに請負人は意に介していない。親族の面会も刑務所のごとく手続きも煩雑で、こうした不自由さに対して患者たちはみな不満に思っている。当局はこれを放置していてよいものであろうか？

3 本目は昭和6（1931）年12月12日付、第394号記事³³である。これは楽生院に関する記事ではなく、馬偕医院長のテイラー氏による淡水のハンセン病療養施設建設への地域住民の反対に関する

³¹ 鄭志敏前掲書 pp.531-532

³² 鄭志敏前掲書 pp.545-546

³³ 鄭志敏前掲書 p.618

内容である。記事タイトルは「淡水テイラー氏の癲病院建築 住民ら依然反対、工事は次第に進捗」となっている。内容は以下の通りである。

台北馬偕医院長テイラー博士が淡水街向かいの観音山ふもとの八里庄に癲病院建設を計画して以来、淡水街の住民たちは地理的・衛生的な理由から多くが反対しており、代表を選出して警務局や台北州を訪れて反対意見を述べ、代表者から台北州の平山知事に対して住民たちの反対世論を伝えた。その後知事自らが調停に乗り出し種々の折衝を行ったが、テイラー博士は当局からの許可を得て、自分の土地ですでに工事を始めていることから、なかなか譲歩解決に至らなかった。一方で問題となっているにもかかわらず、病院側が工事を増加し強化したため、淡水街住民たちはいよいよ憤慨し、一昨日は反対側住民大会において事件が起こされるところであったが、州当局が間にはいって事なきを得た。今月7日には淡水街の盧子山、林輝焜らが台北市の許丙氏のところに出向いて対策を協議し、双方が直接交渉をするための準備を行った。翌8日には淡水街代表の國吉、中野、盧、林、汪の5氏とテイラー博士による第1回会談が行われた。双方がそれぞれの意見を陳述したが、主張が異なり歩み寄りが困難であったため、次回面談を約束して散会した。この問題に関しては、一昨日ある住民が「病院の敷地は市街地からは距離があるが、港に近いので衛生的にもまた感情的にも不都合だと考えているが、テイラー氏はすでに工事に着手しているため、その反対運動は非常に大変だ」と述べている。この問題がいかに推移していくか、目が離せないところである。

これらの記事内容に関してまとめられることは、1本目の記事では楽生院という療養所が開設され、華々しく開設祝賀式典がとりおこなわれたこと、その受診手続き等に関すること、入院治療費が無料であり、外来診療が行われること、2本目は実際に入所した患者に聴くと食事の内容や量がすべて日本式で不満があること、家族の面会も刑務所のような内部からの不平と不自由さを書いたもの、3本目は馬偕病院長テイラーの楽山園開設について周辺住民からの反対が根強くあるが、すでに総督府が許可を出して実際の工事が着手しているため、なかなか住民と折り合いがつかないことが主たる内容であり、『臺灣日日新報』で扱われたようなハンセン病に関する絶対隔離主義か解放治療主義かのような論争はまったくみられない。1022本の医事衛生記事のなかでハンセン病や楽生院に関するものがわずか3本しかなかったことは、これまで日本人を中心に読まれてきた『臺灣日日新報』とは異なる特徴であるといえるだろう。平田が1920年代の新聞紙上の論争をまとめた資料とは対照的な本数である。

2-3. 書物のなかに著された楽生院の記録

楽生院の記録については、楽生院自身が編纂し刊行したものが極端に少ない³⁴。植民地時代については年度ごとの事業報告があるが、これはほとんど官報に近い運営記録である。戦後、台湾政府

³⁴ 戦後楽生院が編集出版したものは『臺灣省立樂生療養院廿五周年特刊』（1955）、『臺灣省立樂生療養院年刊』（1959）、『臺灣省立樂生療養院三十周年紀念特刊』（1960）、『癲病防治十年』（1963）の4冊のみで、あとは公文書として「癲病防治統計報告」（1976-1981）、「楽生院業務簡報」（1991、1992、1996、2000）だけである。これらのなかで筆者が国家図書館で閲覧できたのは、『廿五周年特刊』（1955）のみであり、他は樂生療養院および衛生署に残されているもののみが現存物である。

に接収された楽生院についての記録も極端に少ない。これまでの出版物の中では台北県機関誌として刊行された劉集成（2004）『樂生療養院志』がいちばんまとめられているが、これは現在国家図書館と台湾大学図書館でしか閲覧することができない³⁵。これは台北县政府文化局が県の成立50周年を記念して台北県機関誌を4巻シリーズで企画したものの1冊である。著者の自序によると、とりかかって出版まで4年が経過しているというが、1930年に楽生院が設立されて2000年で70周年となった時期から取り組みはじめ、ちょうどMRT問題で楽生院の移転が取り沙汰されるようになった時期とも重なり、楽生院25人の入所者が東京地裁にハンセン病補償法による補償請求棄却に対する提訴を行い、世間の注目が高まった2004年での出版となった。

そこに生活した人々の暮らしの記録から楽生院の状況を知るには、何冊かのインタビュー記録集や写真集によってうかがうことができる。台湾で出版されたものは、たとえば中華希望之翼協会（NGO）張平宜（2004）による『悲歡樂生』、写真家・文筆業の張蒼松（2006）による『解放天刑』、行政側（地方政府）が作成したものとして臺北縣政府文化局（2006）による『行政院衛生署樂生療養院擴大調查研究—訪談記錄暨照片測繪圖集』がある。学生運動に加わった学生たちが記録したものとして林家承・李幸玲・楊依捷・周好珊・朱光弘・李長偉（2008）『再見樂生』、新しいものでは樂生療養院口述歴史小組（2011）『樂生一頂坡角一四五號の人們』などがあげられる。日本でもすでに楽生院に関する写真集等は出版されており、八重樫信之（2006）『絆～「らい予防法」の傷痕—日本・韓国・台湾』、寺島萬里子（2011）『韓国・台湾のハンセン病』などがあげられよう。

外側から楽生院を見た記録としては、個人史や伝記の中にその姿をみることができる。ひとつは戦後、楽生院を訪れた日本人医師の記録である。野島泰治（1896-1970）は1927年より41年にわたって大島青松療養所に勤務した医師で、1933（昭和8）年から35年にわたって大島療養所の所長をつとめた人物である。野島（1973）『祈る：らい医師の海外紀行』には彼が1956（昭和31）年と1964（昭和39）年の2回にわたって戒厳令下の台湾へ行き、楽生院や楽山園、台湾大学医学院を訪れた記録を残している³⁶。

また犀川一夫（1918-2007）は、1944～1960年を国立療養所長島愛生園で勤務し、1960～1964年は日本キリスト教団海外宣教委員会及び日本キリスト教海外医療協力会より台湾痲瘋教会に派遣され、1964～1970年にはWHO西太平洋地区らい専門官として10年間を台湾で過ごしている。犀川（1989）『門は開かれて：らい医の悲願—四十年の道』には、この当時の台湾のハンセン病に関する話題、楽生院に関する内容や犀川自身の台湾生活などが豊富³⁷に書かれており、犀川（1996）『ハンセン病医療ひとすじ』にも短いながら台湾滞在時のことが書かれている³⁸。先述したように楽生院

³⁵ この『樂生療養院志』の内容については、後述する野島（1973）、犀川（1989）の著書とあわせて別稿で扱う予定である。

³⁶ 野島泰治（1973）『祈る：らい医師の海外紀行』（野島富美発行 非売品：国立ハンセン病資料館所蔵）pp.21-23, pp.222-230

³⁷ 犀川一夫（1989）『門は開かれて：らい医の悲願—四十年の道』（みすず書房）pp.140-154, pp.174-247

³⁸ 犀川一夫（1996）『ハンセン病医療ひとすじ』（岩波書店）pp.153-157

については戦後から2000年代に至るまでの記録に限られており、また戦後の台湾におけるハンセン病問題研究に関しても一種の空白期間ができて³⁹。それを日本人の記録から補うことができるのは特殊な状況といえるだろう。しかし野島と犀川の記録については別稿で扱う予定があるため本稿では割愛する。

ここでは台湾で出版された馬偕病院長テイラーの伝記のなかから植民地時代の楽生院に関する記述をひろうこととし、陳文榮（2005）『臺灣癩瘋病救助之父：戴仁壽小傳』、董英義・陳秀麗（2010）『台灣癩病患者的守護天使—戴仁壽醫師傳』をとりあげる。陳文榮の『戴仁壽小傳』は簡易版であるため、楽生院に関する記述内容は、ほぼ董英義・陳秀麗の『戴仁壽醫師傳』と同じである⁴⁰。董英義は医師として彰化基督教病院にも勤務経験があり、台湾教会広報社の総編集も担当している人物で、本書はテイラー来台100周年を記念し、馬偕記念病院から助成を受けて出版されたものである。

『戴仁壽醫師傳』には、楽生院に関わる記述が2ヶ所ある。ハンセン病療養所に関しては、テイラー自身が設立した楽山園に関して、その準備段階から開設までの記述がもっとも長い。しかしこの伝記を読むとテイラーと楽生院は深い関わりがあったことがわかる。1つは楽生院の建設予定地に関するものである。現在、楽生院の所在地である新莊郡新莊街頂坡角の迴龍地区は、もともとテイラーが自分のハンセン病療養所を開設しようと予定していた土地である⁴¹。テイラーは1928年4月に当時の衛生部長角田廣次の監査を受け、当該地にハンセン病医院を建設する許可を得ていた。同年10月、日本政府はテイラーが医院建設のための募金をつくる許可を与え、テイラーは積極的に募金活動を開始した。台湾人で構成されている文化協会はこの件を知り、協会所属の台湾人医師が雑誌上で日本政府を批判し、「日本政府は台湾のハンセン病患者の治療と世話を外国人宣教師に丸投げし、テイラー医師が個人的に医院建設資金を集めようとしている」と論評した。

このとき、衛生部長はすでに角田から奥田達郎に代わっており、1929年1月25日に奥田はテイラーに新莊迴龍地区に視察に連れていくよう求め、この監査が終わればすぐに医院建設の許可が下りるものだと考えていたテイラーは奥田他4名の顧問を連れて現地を訪れた。しかし奥田は視察に満足した後、テイラーに「この地域はたしかにハンセン病医院をつくるのに適している。日本政府はこの土地を接収し政府がハンセン病医院を建設するものとするから、君は他の土地を探してくれ。政府も協力する」と述べた。テイラーは怒って聖書中の一節をあげて批判し、国王が人の女房を寝とるくらい悪質な行為だと批判した。当時衛生行政官は警察行政官でもあったため、こうした批判はテイラーの身の危険も考えられたのであるが、通訳が婉曲に訳したため、その場にいた人々

³⁹ 范燕秋（2010）「臺灣的美援醫療、防癩政策變動與患者人權問題，1945至1960年代」（國立臺灣師範大學臺灣史研究所『東亞近代漢生病政策與醫療人權國際檢討會論文集』）p.181

⁴⁰ 陳文榮（2005）『臺灣癩瘋病救助之父：戴仁壽小傳』（臺北縣政府文化局出版）pp.44-47 新莊の土地を日本政府に譲るくだりは、この本ではテイラーは怒りもしなかったと美化して描かれているが、この点は少し食い違いがある。

⁴¹ 董英義・陳秀麗（2010）『台灣癩病患者的守護天使—戴仁壽醫師傳』（財團法人台灣基督長老教會台灣教會広報社）pp.93-97

は彼の言葉を聴いて笑い、奥田は「テイラー医師、私はわが政府のこうした行為は申し訳ないと思っている。あなたのような外国人宣教師が個人の力でこのような土地を探し、ハンセン病医院を建設しようとしている。すでにあなたの人道的な目的は十分に達成されたといえるものではありませんか。いま政府はあなたの土地を使おうとしているが、この土地は必ずや政府によってハンセン病医院を建設します。」と伝えた。テイラーは納得こそしなかったが、落ち着いて考えてみると日本政府もまたハンセン病患者のために病院をつくろうとしているのだから、その目的は自分と同じである。彼は政府と良好な関係を保つためには、この土地を譲るべきだろうと考え、その結果、日本政府が33万円の予算をつけて「公立癩病醫院」を建設した。それが今日の「樂生療養院」である。

またテイラーはハンセン病患者への治療や対応で国内外から高い評価を得ており、日本政府からも重要人物と目されていたため、1930年10月の皇室からの招きに応じ、同年11月10日に東京へ出かけた。日本、朝鮮、台湾の3地域で「救癩事業」につとめ、叙勲を受けた者は81名であったが、うち台湾地区からは2名、すなわち樂生院院長の上川豊とテイラーであった。またこの年の12月、テイラーの誕生日には台湾総督府から特別表彰式がとりおこなわれ、上川院長とテイラーはここでも金一封と記念品を受領している。当日の式典には政府官僚、警察総長、軍司令部秘書、教育部長や地元名士が多数出席した。テイラーは受領した獎金を樂山園の基金としたという。

その後テイラーは土地を探し求め、淡水街八里庄に樂山園を開設する。その開設にあたって苦難が続き、先の《臺灣民報》の記事にもみられたように地元住民の建設反対運動に遭っている。この間の経緯もこの『戴仁壽醫師傳』には詳細に描かれているが、その後樂生院が登場するのは、樂山園開設後の部分である⁴²。

樂山園でテイラーは自給自足の生活を目指し、自ら希望して入園した人々に対し、鉄条網や高い壁をつくらなかわりに厳格な園の規則を守ることを求めた。対照的に樂生院は強制入所ではあったが、国家財政の支持があるため経費もあり、待遇も樂山園よりよく、入所者に対する要求も少なく仕事も楽だといわれていた。そのため樂山園の入園者たちは樂生院のようにしてほしいとテイラーに待遇改善を申し入れたが、テイラーはこれを拒否したためその後十数名のものが集団で樂生院に移転するという事態も起こった。この一件については宣教師たちや教会のなかで、「ハンセン病問題は複雑でしかも手のかかる医療であり社会問題であるから、本来は政府がきちんと施設を運営する義務がある。テイラーはこの事業から手を引いて政府に運営をゆだね、馬偕病院経営に専念すべきだ」という議論がおこった。しかし一方ではテイラーが多くの時間と精神を費やして探し出した理想的な新莊の土地を日本政府が濡れ手に粟のようにかすめとろうとしたことについて、「テイラーは日本政府がハンセン病問題を重視し始めた兆しとして土地を提供した。その後テイラーがこれほど心を砕き、多額の資金を投入してようやく開設した樂山園の運営を政府に委ねて国有化するのはどうなのか、本来であればハンセン病患者の世話は政府の責任をもって担われるべき事業で

⁴² 董英義・陳秀麗 (2010) 前掲書 pp.157-158

あるが、いまはその時期ではないのではないか」という意見もあったのである。

この伝記に描かれていたのは、宣教師テイラーがハンセン病患者のために奔走し、患者たちの安住の地を求めて苦闘する姿や信仰心に基づき毅然とした態度で当初の目的のためにそれを貫く姿勢である。またそれとは対照的にテイラーなど宣教師たちの活動を利用しつつ、政府の体面を気にしながら彼の事業を邪魔し妨害する存在として台湾総督府が一貫して描かれていたことが印象的である。

3. 戦後のハンセン病問題（研究動向篇）

2-3.において日台双方で楽生院に関してすでに出版されている文献をとりあげたが、本節では戦後、楽生院が台湾政府に接収されて以降の台湾におけるハンセン病や楽生院に関する学術的な研究動向をみていきたい。3-1.では台湾における学位論文、3-2.では雑誌論文をとりあげて、国家図書館のデータベースからハンセン病や楽生院関連論文がいつ頃、どのようなタイトルで執筆されているのかを一覧にまとめ、その研究動向を探る。その後3-3.においてこの問題に関する全体的な研究趨勢を概観したい。

3-1. 学位論文の傾向

台湾の学位論文は有職研究者の学術論文にも引用され、一般の学術論文としての扱いを受けていることを特徴としている。そのため台湾の学位論文でそのテーマがどれくらい扱われているかということは、その後の若手研究者の研究動向にも直結し、研究趨勢をはかるひとつの指標になると考えられる。

台湾の国家図書館⁴³には台湾全土の大学院で学位授与された学位論文がすべて収録されている⁴⁴。そのデータベースで楽生療養院やハンセン病をキーワードにすると、2012年11月時点で38本の学位論文が検索できる。大学に提出されたものはすべて登録されることになっているが、なかには台湾大学図書館でしか探せなかったものもある⁴⁵。現時点で確認できた楽生院やハンセン病に関する学位論文のうち、執筆者が非公開にしているもの、時限付き公開にしているもの、あるいは所属大学図書館でしか閲覧できないもの⁴⁶を除き、筆者は現在31本を入手している。

⁴³ 日本の国会図書館にあたる台湾の国立図書館。前身は国民政府による国立中央図書館で1954年に南京から台北に移され、1996年に国家図書館と改名された。貴重本26万冊を含め、蔵書数は300万冊にのぼる。

⁴⁴ 2012年12月2日時点で、国家図書館が全文権利委託されている論文数は24万2526本、国家図書館内PCのみで閲覧可能なPDF化された論文が1万6252本、概要は73万7121本が登録されている。

⁴⁵ 大学に提出されたものはすべて登録されていることになっているが、表1のno.1とno.7の台湾大学の論文2本は国家図書館に登録されておらず、台湾大学の学位論文書庫でしか検索できなかったものである。なおここでいう学位論文には修士号、博士号ともに含まれている。

⁴⁶ 提出から一定期間をおき、数年後の〇〇年〇月〇日よりWEB上で公開するという条件つきのものがある。またPDF化されておらず紙媒体のみでの公開、あるいは複写不可で閲覧のみしかできないもの、国家図書館に所蔵はしてあるが非公開扱いで執筆者の所属機関に出自かなければ閲覧できないものなど、執筆者のほうで制限

それらの論文を年代の古い順に論文タイトル、著者名、大学（所属）、被引用数をまとめたものが表1である。もっとも古いものは1976年に提出された「台湾地区癩病之調査研究」であるが、これは台湾大学医学院の大学院生康淑恵が楽生療養院と基督教台湾ハンセン病救済協会所属の療養院や外来診療所の入所者、患者を対象としてハンセン病の医学的統計をとったものである。それから2000年代に至るまでハンセン病や楽生院に関する論文は見当たらず、次が2000年の范燕秋の博士論文「日本帝國發展下殖民地台湾の人種衛生」である。范燕秋はこの論文からハンセン病問題を扱うようになり、「植民地医学」をハンセン病問題から扱っている台湾の数少ない研究者である。彼女はこの論文の中で、植民地時代においては台湾のハンセン病患者が日本よりも多いだけでなく、台湾の患者が罹患しているハンセン病の型が危険なものであることが繰り返し強調され、統治者側が日本人に感染するおそれがあるという理由によって強制隔離の実施を正当化したと述べている。その後彼女が有職者となって学生を指導する立場になったこともあり、この論文の被引用数は群を抜いている⁴⁷。

その次が2001年に清華大学歴史研究所に出された陳威彬の「近代台灣的癩病與療養—以樂生療養院為主軸」である。この論文は台湾における楽生院をテーマとしたハンセン病関連学術論文の始まりといわれ⁴⁸、これまでにこのテーマで提出された修士論文の中でも引用回数の多い論文である。陳威彬は歴史学専攻で、1860～1960年の約100年間の台湾において各時代の政権がハンセン病をどのように扱ってきたか、また楽生院がハンセン病問題の中でどのように扱われてきたかを考察した。陳威彬論文の次は2004年に1本、2006年には4本が提出されており、年間本数が多いのは2007年（8本）、2008年（6本）、2009年（5本）、2010年（5本）である。全体として扱われている本数は少ないものの、2000年代後半にはいり2006年頃から論文数が増えたことは明らかである。

筆者の入手した31本の論文は大学院生の問題関心が楽生院の保存運動や日本政府への国賠訴訟問題とリンクし論文数の増減もそれを反映しているが、特徴的なことは楽生院の歴史的な沿革や植民地医学の分析というものよりも、映像記録を残す分野を専攻とする院生が書いたものやマスメディアのありかた、あるいは社会運動としての「楽生院事件」という切り口で取り組んだ論文が比較的多いことが指摘できるだろう。

3-2. 雑誌論文の傾向

おなじように国家図書館に収録されている雑誌論文⁴⁹についてハンセン病や楽生療養院、楽生事

をかけているものがある。

⁴⁷ 范燕秋は1994年に「日據前期臺灣之公共衛生—以防疫為中心之研究（1895-1920）」（國立臺灣師範大學歷史研究所碩士論文）というテーマで修士論文を提出しており、修士の頃から植民地時代の医事・衛生をテーマにはしていたようであるが、ハンセン病や楽生院という主題とは少し異なるため今回のリストからははずしている。

⁴⁸ 范燕秋（2005）『疫病・醫學與殖民現代性—日治臺灣醫學史』（稻鄉出版社）p.186

⁴⁹ この「雑誌論文」の検索は話題性ということも考慮して、学術論文のほかに一般論文も含める形で検索をかけている。そのため表2の論文にも学術論文ではないものが含まれている。

件等をキーワードにすると74本の雑誌論文が検索できる⁵⁰。古いものは1951年の頼尚和による「臺灣癩病防治簡史」というハンセン病予防に関する論文にまでさかのぼることができる。頼尚和は終戦後、日本統治がとかれたあとの初代台湾人楽生院長⁵¹であり、1952年に『中國癩病史』⁵²という書物を出している。この書物は台湾におけるハンセン病に関する初めての専門書であるが、附記によると経費の関係で出版に至らず複写数十部を周囲に配布したが、周囲の勧めもあって、のちに自費印刷で出版したとある。この第7章に「臺灣癩病防治簡史」は収録されている。50年代に書かれたものはこの1本のみである。

1960年代に書かれたものは7本で、うち4本は楽生院医師である胡舜之の「癩瘋病常識」⁵³である。ほとんどが医学系雑誌に掲載されており、タイトルから疾病そのものに関する医学的内容であることが推察される。70年代の論文は3本、うち1本はハンセン病と台湾省立楽生院を紹介するものであるが、掲載は医学系誌であり、内容の中心はハンセン病の紹介である。またもう1本はハンセン病患者や精神病患者の治療場所に関する内容である。80年代、90年代はそれぞれ5本ずつであるが、同じ執筆者によるものが多い。内容はやはり病気に関するもの、その病気に対する知識や扱いに関するものが中心であり、掲載は医学系誌である。

2000年代にはいつてからは論文数が45本に増加している。2000年代前半の特徴は、宗教とハンセン病に関するもの、とくに宣教師テイラーを扱ったものや植民地医学を意識したものが登場していることである。楽生院をタイトルに入れた論文も4本でてくるが、執筆者の1人は楽生院院長、もう1人は楽生院所在地の新莊市関係者である。2005年以降になると楽生院がタイトルにはいるものが増加するが、とくに2005年6本、2007年13本、2008年7本と、この3年は他の年よりも論文数が多い。また楽生院の移転問題、保存問題をテーマとする論文が登場するのも、2000年代後半の5年であり、入所者の人権について語られるようになるのもこの2000年代後半になってからである。2010年代にはいつてからの論文数は8本である。現在のところ2011年までのものしか検索できないが、とくに2010年代の論文はほとんどが楽生院をテーマとするものとなっている。

以上のことからわかるのは、台湾において2000年代にはいるまでに掲載されている雑誌論文はハンセン病という病気そのものが中心となる内容であり、病気以外のこと、例えば楽生院や宣教師や

⁵⁰ この3つのキーワードをいれて、or検索をかけると当初224本であった。しかし内容がまったくキーワードとは無関係なものも少なくなかったため、筆者が摘要などで内容を確認し、最終的に74本を選出した。

⁵¹ 頼尚和(1899～?)は1925年に台湾医専を卒業、1926年京都帝国大学医学部に留学、1931年帰国後、台北更生院で杜聰明のもとでアヘン研究を行い、杜の推薦で1933年楽生院に着任。日本統治期末期に楽生院の院長代理をつとめ、1945年楽生院が台湾政府に接収されたのち、初代院長となった。1946年に台湾大学公共衛生研究所に異動した。この書物を世に問うた時の肩書は「國立臺灣大學醫學院教授・醫學博士」となっている。

⁵² 頼尚和(1952)『中國癩病史』 この書物は台湾大学図書館に通って探し、ようやく複写することができたものだが、古いものであるため傷みもひどく、複写に困難を伴うほどであった。

⁵³ 表1をみるとわかるように、胡舜之がシリーズで執筆している「癩瘋病常識」は2が欠けている。おそらく国家図書館には収蔵されていないため検索できなかったものと思われるが、実際には2が存在していると8本になるはずである。

神父等のハンセン病医療活動などに焦点をあてたようなものはすべて2000年代以降に書かれているということである。

また雑誌論文、学位論文等を収録している電子ネットサービス⁵⁴にアクセスし、ハンセン病、楽生療養院、楽生事件をキーワードにする⁵⁵と、期刊雑誌論文22本が検索できた。このデータベースには台湾と中国大陸で出版されている学術季刊資料のネット公開論文が主に収録されており、人文科学、社会科学、自然科学、応用科学、医学及び生命科学の5大領域がカバーされている。

検索した雑誌論文のタイトルを分類すると、22本の論文のうちハンセン病やその予防を扱う医学的なものが6本、病気の概念変遷などを扱うものが3本、植民地時代の楽生院とハンセン病について扱うものが3本、ハンセン病治療に携わった医師としての英国人宣教師テイラーを扱うものが3本、療養所保存運動などのいわゆる「楽生事件」を主題とするものが7本となっている。

2000年代以前に書かれた論文はすべて医学的内容のものであり、掲載誌もその関連誌であることを特徴としている。楽生事件をテーマとする7本の論文は都市計画や土地問題、政治思想、教育問題などを扱う研究誌に掲載されており、掲載誌を史学系とする論文は4本である。植民地時代の楽生院やテイラーを扱う論文は史学系研究者が執筆しており、そうした「過去」を主題とする論文が7本で、楽生事件を扱う論文数7本と同じであることは興味深い。

このネットサービスではWEB上に公開されているものだけを扱っているので国家図書館のデータベース検索よりも検索した論文数が少ないのは当然であるが、それでもここ20年ほどに発表された台湾の学術論文のなかで、ハンセン病や楽生院を研究テーマとする論文が22本と数が少ないことは特徴としてあげられよう。タイトルから大別すると医学系が6本、過去を主題とするもの7本、現在を主題とするもの7本、その他2本である。これも台湾の学術界におけるハンセン病や楽生院への関心度をはかるひとつのバロメータになるだろう。

3-3. 全体的な研究趨勢

台湾総督府が腺ペストやマラリア対策に重点を置いてハンセン病をあまり重視していなかったのとは対照的に、台湾で出版された医療史関連書籍における年表には、1930年の楽生院の設立と1931年の上川院長の着任、1933年の「台湾痲瘋預防協会」の設立、1934年の「痲瘋預防令」公布、また1945年に楽生院が接収され台湾省立楽生療養院に改称されたこと、その初代院長に頼尚和が就任したことが記載されている⁵⁶。

⁵⁴ ここではairti Library（華藝線上圖書館）を利用した。CEPS（中国や台湾で出版された季刊雑誌論文ネットサービス）、CETD（台湾の学位論文ネットサービス）、台湾の各大学や学界における重要検討会議論文、台湾における出版書籍の4分野の検索がかけられる。CEPSと会議論文は1991年以降のもの、CETDは2004年以降の学位論文、書籍は2000年以降に出版されたものについて検索可能である。

⁵⁵ キーワードはすべてor検索をかけ、検索範囲を広くしている。

⁵⁶ 例えば莊永明（1998）『台湾醫療史—以台大醫院為主軸』や陳永興（1997）『台灣醫療發展史』にはどちらも年表に記載がある。筆者の莊永明は文筆家、陳永興は医師でもある。

台湾史研究のなかで、とくにこうした医療史に関心をもたれ始めたのは、1990年代になってからと言われる。飯島（2000）によれば、これらの研究は植民地統治時期の医療・衛生事業の展開が台湾社会に与えた影響を分析しようとするもので、植民地時期の医療・衛生事業の展開を今日の台湾における衛生事業の基礎としてとらえるところに研究の特徴がある⁵⁷という。

2000年代にはいつてからは植民地医学への関心も高まり、ハンセン病や楽生院は其中で注目されるようになったテーマである。すなわち植民地支配の象徴として、支配する側とされる側という国家間の政治的位置づけと、強制隔離をする側とされる側が重なり、楽生院は被支配の象徴的な姿として定義されるようになったと言っても過言ではない。

ここまでみてきたように、ハンセン病や楽生院に関する研究は2000年代にはいつてから論文数が増えている。これには楽生院の移転・保存問題が社会的にクローズアップされ報道が増えたこと、また入所者を原告とする日本への国賠訴訟などが取り上げられるようになり、楽生院に対する社会的な関心が高まったことが影響しているといえよう⁵⁸。ハンセン病問題に関する論文の内容は、楽生院や楽山園など特定施設の歴史沿革やそれに関わるテイラーなどの重要人物や植民地政策、療養施設における患者管理、ハンセン病予防に関する隔離主義と外来治療主義などの衝突や協同などに及んでいる⁵⁹。

台湾人研究者によるハンセン病や楽生院に関する研究の全体的な傾向としていえることは、これらのテーマについては植民地時代に焦点をあて、その時代背景の中で楽生院の設置が扱われる傾向にあるということである。日本統治期にはハンセン病の罹患率が日本よりも高いことが強調され、隔離施設の設置が求められた経緯がある⁶⁰が、一般には病そのものの認知度も低く、医学的見地からの台湾人専門家による論文も少ないことが特徴といえる。日本では昭和2（1927）年に「日本癩学会」がつくられ専門家による議論や論文発表の場があったが、戦後になってからも台湾にはそうした動きはなかったようで、台湾人にとっては医学的な注目度も低い分野だったといえよう。

台湾のハンセン病政策については、戦前の植民地時代よりも戦後になってからの研究に欠けており、一種の空白期間になっている。植民地時代に関しては日本側の残した資料も多く、台湾においても近年は植民地医学への研究関心が高まり研究者も出てきているが、戦後の台湾におけるハンセン病政策については、3-2.でみたように発表された論文や公文書等の文献資料が少ないことが特徴である。日本の植民地統治が終わり、朝鮮戦争をきっかけとして1950～1965年はアメリカによる台湾支援時代といわれ、それにもなって医学界全体も戦前の日本の影響を受けた「日本型ドイツ医学」からアメリカ医学へシフトした。アメリカによる支援は戦後の台湾における衛生政策にも影

⁵⁷ 飯島（2000）前掲書 p.132

⁵⁸ 范燕秋はこうした「楽生院を救おう」という社会運動の潮流を1990年代以来の台湾におけるコミュニティ主義の延長にあるものととらえている（范燕秋（2008）「癩病療養所與患者身分的建構：日治時代臺灣的癩病社會史」p.112）

⁵⁹ 王文基・王珮榮（2009）「隔離與調查—樂生院與日治臺灣的癩病醫學研究」（『新史學』20卷1期）p.71

⁶⁰ 范燕秋（2005）前掲書 pp.193-195、王文基・王珮榮（2009）前掲論文 pp.71-72

響を与え、その衛生政策には「ハンセン病」の項目が含まれていた⁶¹という。現在のところ、この時期の台湾におけるハンセン病政策について書かれた論文は范燕秋（2010）のものしかみあたらない。

大学院生による研究（学位）論文はほとんど2000年代半ば以降を中心に書かれたものである。また論文内容も楽生院の移転・保存問題や国賠訴訟の動きとリンクしたものが多いことを特徴としている。楽生院の敷地がMRT新莊線の車両基地予定地として浮上したのは1990年代後半であり、2002年から敷地内工事が開始されている。2005年の新ビルへの移転を前に、掘削工事が始まってからは敷地をとりまく自然環境や楽生院の歴史沿革、歴史的建造物保存、人権などの観点からさまざまな団体に注目され、楽生院の保存運動が始まっている。こうした活動に入所者が正式に参加するようになったのは2004年夏からであり、同年9月には日本から弁護団が現地入りし、東京地裁への国賠訴訟準備のため戦前からの入所者に対する聴き取り調査も開始している。

大学院生にはこうした社会運動に実際に参加した者もあり、その活動や経験に基づいて論文を執筆した者も少なくないという特徴がある。反対に有職研究者による研究論文は植民地時代に焦点をあてたものが多いことが特徴といえよう。ひとつには植民地医学という医療史におけるひとつの学問的潮流があり、そのなかで研究者が日本統治期に注目するようになったことであろうが、筆者にはそもそもこうした問題を研究テーマとしている研究者数が少ないことに加え、現状や今後の問題に関心の高い有職研究者が少ないことが気になるところである。

4. ハンセン病問題と楽生院

これまで筆者は楽生院が台湾における植民地医学を象徴するもののひとつとしてとらえられてきたと考えていた。日本政府を相手とする国賠訴訟の中でも、台湾総督府による強制隔離政策によって入所者が被害を受けてきたことがクローズアップされ、筆者もこの問題について調べ始める以前は、日本国内の強制隔離政策の影響を台湾総督府がそのまま受け入れた形で開設されたのが楽生院だと考えていた。

しかしここまで見てきたように、当時の台湾における医学界においては腺ペストやマラリアの克服が優先され、ハンセン病政策はそれに付随するものとして登場したものであり、台湾における公共衛生政策においてもハンセン病の位置づけは低く、医学校や帝大医学部において重視されていたとは言い難い。そのため当時の台湾における医事衛生記録の中でも言及は少なく、それが当時の医学者たちに共有された認識であったことがわかる。そして楽生院は本国の影響を受けて強制隔離主義を貫くためにつくられたというよりも、その当時の国際的なハンセン病に関する治療解放主義の流れの影響を受けていたこと、さらには外国人宣教師によるハンセン病治療専門病院の建設などは

⁶¹ 范燕秋（2010）前掲論文p.180-181

総督府の活券にかかわるという面子を重んじる形での開設だったこともみえてくる。

ここで注目しておくべき点は、台湾に派遣された医師たちが決して医学界におけるエリートではなかったことである。日本の医学界では傍系といわれる北里柴三郎の弟子たちが、日本地域以外の台湾、朝鮮、満州などの植民地での医学活動に大きな貢献を残した⁶²といわれ、その中には後藤新平の衛生局時代から片腕として働いていた高木友枝⁶³も含まれている。初代台北病院長・総督府医学校の初代校長であった山口秀高、そのあとを継いだ高木友枝はともに東京帝大卒であるが、彼らに台湾赴任を勧めた後藤新平は東大卒ではなく、東大のような教育や文部省の画一的教育を嫌い、台湾で文部省の管理を受けない学校をつくろうとしていた⁶⁴という。

ここで楽生院初代院長の上川豊について考えてみたい。范燕秋（2008）は1930年の楽生院開設当時の上川は青木大勇の影響を受けた国際潮流にのった治療解放主義者であったが、1934年に「台湾らい予防法」を制定し警察と療養所長の行政裁量権が拡大されてから、台湾も隔離の時代にはいったとしつつ、上川が1940年に至るまで人数こそ少ないものの外来診療を継続していた点については評価している⁶⁵。上川は大正6（1917）年に長崎医学専門学校を卒業し、青木門下で皮膚科を専攻している。1919年熊本の国立療養所菊地恵楓園に勤務後、大風子油を研究し、楽生院に院長として赴任する直前の1930年4月に医学博士号を取得している。范（2005）は楽生院がある種の実験研究機関としての性質をもっていたことを指摘し、医師たちが大風子油の治療成績などの業績を上げることに関心で、台湾人と日本人患者の間には待遇差があり、そうした「民族差別」と「皇民化を通じた帝国意識と政治への忠誠に関する特殊な施設」⁶⁶であったと述べている。

王文基・王珮榮（2009）は、楽生院の開設により楽生院関係者の医学的学術論文数が一気に増加したことを指摘し、范と同じように楽生院が医療者にとって一種の大きな実験装置として機能していたと述べている。またこの時期の楽生院が他の医療関係機関との共同研究数も多かったことが指摘されている。1900年代前半の台湾で、日本人および台湾人の研究者がもっとも投稿していた医学誌は《臺灣醫學雜誌》と《レプラ》である。《臺灣醫學雜誌》は植民地時代台湾における医学界の機関誌であり、台湾における関連領域のもっとも重要な学術雑誌であった。《レプラ》は日本癩学会機関誌であり、1930年から大阪皮膚病研究所で出され、日本、台湾、朝鮮や華北のハンセン病医学に関する研究や情報を発信していた。台湾関連のハンセン病研究は《臺灣醫學雜誌》のほか《皮膚科及泌尿科雑誌》、《臺灣齒科月報》、《大日本耳鼻咽喉科會會報》、*Acta aponica Medicinae Tropicalis*などの雑誌に散見されるほか、《臺灣日日新報》、《臺灣民報》、《臺灣時報》、《社會事業の友》な

⁶² 劉士永（2001）前掲論文 pp.260-261、飯島（2005）「日本の台湾統治とマラリア」（『マラリアと帝国』東京大学出版会）pp.36-37

⁶³ 高木友枝（1858～1943）は1893年から北里が所長をつとめる伝染病研究所に勤務し、内務省衛生局防衛課長を経て明治35（1902）年に台湾総督府病院長兼台湾総督府医学校長、台北病院長となっている。

⁶⁴ 鶴見祐輔（2005）前掲書 pp.446-449

⁶⁵ 范燕秋（2008）前掲論文 pp.100-103

⁶⁶ 范燕秋（2005）前掲書 pp.227-229

ども関連の報道やコラムがみられる。

抄録や雑録約30本をのぞき、台湾の1930年までのハンセン病関連論文は臨床（治療と診断）、流行病学あるいは公共衛生（ハンセン病患者統計や法令）、および細菌学をテーマとするものが9本で、うち6本は臨床関係で治療に関するものが最も多い。もうひとつの特色は執筆者が宮原敦や於保乙彦、青木大勇などの病院勤務者で、その多くは台湾総督府の台北病院の皮膚花柳病科の医師だったことである。1930年末を境に、台湾のハンセン病に関する研究論文は数も内容も劇的に変化し、1931年から1944年の14年間に関連する原著論文及び臨床実験、講演抄録などは85本となり、1910～1930年までの21年と比較して9倍以上に増えている。

1930年を境に論文数が増えているのは、楽生院の開設によるところが大きい。開設にかけた費用やスタッフ数もテイラーの楽山園より充実しており、論文執筆者には楽生院に勤務した上川豊をはじめとする医療スタッフ10名や台北医学専門学校の板倉貞壽なども含まれている。これらの人々は1930年から1940年にかけて多くの専門論文を出しており、なかでも上川豊は菊地恵楓園時代の研究を日台比較へと発展させ、論文を量産した。一方、楽山園では治療と患者の自給自足の生活を重んじられ、テイラーはハンセン病研究については行っていないようである⁶⁷。

王らは上川らのハンセン病研究について、さらに詳細に内容までまとめている⁶⁸が、当時世界的にハンセン病について治療実験が進められる中、楽生院の治療目的は自然と「科学的知識の生産と研究者の学術的地位の向上にむかい、治療成果は知識生産を主要目的とする実験室の附属品にすぎなかった」⁶⁹と結論付けている。

台湾における日本人医学者たちの間に、たとえばペストやマラリアなどの感染症に対する防遏で成果をあげ、熱帯医学、植民地医学としての業績を積み、現地の医学教育にも携わることで、日本国内のエリートたちに対する自己顕示や自己肯定といった精神的な動きがなかったといえるだろうか。ハンセン病問題についても、治療法がまだ確立されていなかった時代ではあるが、そこに民族差別的な形で治療の名を借りた人体実験的なことが行われていたとしたら、国内エリートに対抗する実績づくりのためのハンセン病対策であったのではないか？という疑問もわく。業績をあげることによって、本国や医学界の中で認められたい医師側の都合が優先されたとしても、日本よりも「後進地」台湾における日本人の優位性から考えて不自然ではない。日本国内の療養所において、医師対患者間における医師の絶対的優位性を鑑みた際にも同じことがいえるのではないだろうか。

先にとりあげた小田俊郎（1974）は、医学校および台北病院の人事異動が多いことをとりあげ、「これは当初資質のすぐれた学者が就任し、やがて欧米の留学から帰ると内地の医専や大学から引き抜かれたという事情によるものであろう。しかし後年台湾の医学界が漸次整頓してきた時代になると、勝れた学者で、台湾の豊富な研究資料の魅力にひかれ、内地からの招聘に応じなかった教授

⁶⁷ 王文基・王珮榮（2009）前掲論文 pp.83-85

⁶⁸ 王文基・王珮榮（2009）前掲論文 pp.86-90

⁶⁹ 王文基・王珮榮（2009）前掲論文 p.91

も少なくなかった。台湾の気候風土、疫病などは無限の研究資料を提供していたのである⁷⁰という記述がみられる。医療者として小田が「研究対象としての台湾」を評価し、「研究対象としての患者」という視点があったことがわかる一文である。

劉士永（2001）によると、台湾医学は日本医学の垂流ではなく植民地統治における実際の必要以上に、非帝大系の医学者が台湾医学の形成時に細菌学のみならず原虫や寄生虫の研究など非細菌学研究への寛容を示し、また人物をその才能で評価するという主張を行っていたという⁷¹。劉は台湾の植民地医学の特色を「日本の非主流派の医学研究者が新天地を求めて訪れ、彼らの影響のもと、新しい研究課題や治療法が生まれ、台湾医学の特色となり、植民地医学では実用性が重視され、統治の必要のため臨床医学教育を提唱したが、新しい課題や治療法の結合により、逆に日本医学における南方医学の形成に影響を与えた」とまとめている⁷²。このような解釈をハンセン病問題にあてはめて考えると、范や王らが指摘するような楽生院の「実験機関としての作用」も解釈しやすいように思う。

飯島（2005）は、近代西洋医学にもとづく医学・衛生学の日本への導入課程はある意味で東京帝大医学部の歴史であると述べ、東京帝大移管以前の伝染病研究所・北里研究所および慶應義塾大学は、内務省との関係を背景として植民地医学に積極的に関与したと述べている⁷³。こうした日本の学閥や、その背景にある内務省衛生局と文部省との対立の構図などを紐解くことで、近代日本の植民地医学の特色が明らかになるのは大変興味深いことである。

また筆者が本稿でとりあげた《臺灣民報》にハンセン病・楽生院問題がわずかしかりあげられず、平田（2009）が資料とした《臺灣日日新報》と大きな違いがみられた点であるが、これは《臺灣日日新報》が基本的に日本人の読む新聞であり、《臺灣民報》とは読者層が異なることが大きな理由であると考えられる。平田の検証によると、ハンセン病問題については関係者がとくに国際会議などでの潮流に基づき、日本国内での隔離主義か外来治療主義をとるかという論争がそのまま紙面で再現された形になっているが、少なくとも《臺灣民報》をみる限り、台湾人にとってハンセン病問題や楽生院開設が連日紙面をさくほど重視されていたわけではなく、相対的な報道量からみても、この当時台湾側にとって重視されていたのがアヘン問題であったことは明らかである。また本稿では扱っていないが病院批判記事などからも、当時「支配される側」にあった台湾人と統治者側にいる日本人との間に横たわるさまざまな問題をかいまみることができた。

《臺灣民報》は植民地時代の資料の一部に過ぎないが、その時代の台湾社会ではハンセン病の強制隔離や治療解放主義の議論、あるいは楽生院の設置などについて、一部の関係者をのぞいては、それほど重視されていた問題ではなかったことがうかがえる。また資料として外国人宣教師テイ

⁷⁰ 小田俊郎（1974）前掲書 pp.69-70

⁷¹ 劉士永（2001）前掲論文 pp.257-261

⁷² 劉士永（2001）前掲論文 pp.266-267

⁷³ 飯島（2005）「近代日本の衛生学と植民地医学・帝国医療」前掲書 pp.114-121

ラーなどに関する伝記は多いものの、台湾側の楽生院に関する資料が少ないこともこの点を裏付けるひとつの証左なのではないかと考えられる。

戦後の台湾で出されたハンセン病や楽生院に関する論文については、1950～1960年代は時代背景が異なり、当時の台湾の状況を考えると出版物も少なく学界も狭かったはずで、論文数そのものがいまより少なかったことは必然である。しかし戒厳令解除後90年代にはいっても、「植民地医学」というものが注目され医療史研究者が出てくるまで、楽生院やハンセン病への関心は一般市民だけでなく学界でもきわめて低かったといわざるをえない。そのことは人々がそれまであまり関心をもってこなかったにもかかわらず、楽生院の移転・保存運動や国賠訴訟でメディアへの露出が増え、社会問題としてクローズアップされるようになると、連動するように学位論文数が増えたこととも無関係ではないだろう。関連資料を検索するにあたって、「楽生事件」というキーワードが存在していることは、楽生院の移転・保存問題がひとつの「事件」としてとりあげられてきた重みをもつことを意味している。2000年代にはいつてからの楽生院は、過去の帝国主義とセットで人々の記憶に「新たな定着」を余議なくされた施設であるといえよう。

5. おわりに

本稿ではこれまでに出版されている植民地時代の資料や戦後の台湾における研究動向から、台湾におけるハンセン病とその唯一の療養所である楽生院がどのように扱われているのかをみてきた。植民地時代については、日本人の著した書物と台湾人の手による《臺灣民報》の医事衛生に関する記事からハンセン病や楽生院に関する記述をひろったが、そのいずれにおいてもハンセン病問題や楽生院があまり重視されていなかったことが明らかになった。また文献も台湾側の楽生院資料は少なく、宣教師の伝記の中に楽山園との対比で登場するくらいである。日本人の著作については、あえて当時の医事業績について書かれている代表的な数点に絞っているため、あるいは筆者の見落としがあるかもしれないが、全体的な傾向として一部の関係者を除き、当時の台湾医学界においてハンセン病問題があまり重視されていなかったことは他の研究から鑑みても明らかである。

また台湾における戦後の研究動向は、国家図書館などのデータベースを用いて学位論文や雑誌論文の一覧表を作成することによって傾向を明らかにしたが、いずれも研究が増えるのは2000年代以降のことであり、これが社会問題としてクローズアップされた楽生院の移転・保存運動や国賠訴訟と関連していることもわかった。またこの問題に関する戦後研究においては、医学研究を含め植民地時代に日本人が書いた論文数にくらべ相対的に研究そのものがまだ少ない。研究内容も若手研究者は2000年代以降の社会運動とリンクした形の内容が多いが、有職研究者の研究対象はほとんどが植民地時代にある。今回の研究では、「医療者の研究対象としての患者」「実験機関としての施設」という問題にたどり着き、今後の研究課題として筆者には大きな示唆を与えるものとなった。

筆者が本稿を書こうと思ったきっかけは、別の課題のために台湾でフィールドワークを行い、国

家図書館や台湾大学図書館に収蔵されている楽生院関連の先行研究論文や書籍を探してみた際、関連文献の少なさに驚いたことにあった。筆者は当時すでに出版されていた写真集や記録集等は入手しており、学生運動に関する台湾のネット記事やブログも目にはしていたが、学術論文数は少なく、楽生院から出されている刊行物や院史も見当たらなかった。またテイラーに関する伝記や記述は多いにも関わらず、楽生院に関わった人々に関する記録はほとんどなかった。すなわちいい意味でも悪い意味でも、近年にいたるまで楽生院の存在そのものに関心もたれてこなかったのだと推測されたのである。

その後調べていくうちに、一般には知られていない『樂生療養院志』が刊行されていることがわかった。しかしこれも楽生院が直接編纂したものではなく、楽生院所在地の地元政府が地方史として編纂したシリーズものの一部として刊行したものであり、楽生院が編纂したのは『臺灣省立樂生療養院廿五周年特刊』（1955）、『臺灣省立樂生療養院年刊』（1959）、『臺灣省立樂生療養院三十周年紀念特刊』（1960）、『癩病防治十年』（1963）のみで、植民地時代から現代にいたる「院史」にあたるものはつくられていない。記念誌の内容は時代的な背景もあったのだろうが、少し詳しい案内資料という類のものであり、英文概要がついたものである。植民地時代は日本が年報の形で事業報告を出しているが、終戦後に散逸したものもあり、筆者が入手したものは戦後資料として不都合な部分にはかなり黒塗りのあるもので、資料集に収集されているものとは底本が一致していない。楽生院の移転・保存運動が盛んにおこなわれていた時期が楽生院の手による院史作成のひとつの機会だったと思うが、これまでの訪問時の印象からは、楽生院側もすでに出版されている『樂生療養院志』をもって院史にかえ、院側から新たなものを出版する意向は持っていないものと思われる。

台湾は宣教師による布教やその医療が早くから入っていたという地域的特殊性をもち、戦後もその影響をかなり強く受けている土地柄である。すなわち台湾におけるハンセン病関連の歴史をひもとくのであれば、教会資料や欧米に持ち帰られた文献・史料は探すべきものであり、また戦後のアメリカと台湾との関係を考えると、アメリカに保管されている資料の検討も欠かせないだろう。本稿の執筆にあたってはそこまで至らず、今後の課題として残されている。また研究動向を探るにあたって台湾の科研費報告書にあたる「行政院国家科学委員会專題研究計画成果報告」や学会予稿集・検討論文集などに収録されたものをたどれていないことも課題として残ったが、限られた資料や研究動向のなかでもおおまかな道筋についてはたどることができたのではないかと考えている。残された課題は多いが、今回は複写入手することができた『樂生療養院志』を中心として、犀川ら日本人の残した周辺資料等ともつきあわせながら、開設から80年以上におよぶ楽生院の歴史をたどっていきたいと考えている。

表1 ハンセン病・樂生院関連學位論文 (年代順)

提出年	論文タイトル	著者名	出身大学	所属	引用
1 1976	台灣地區癩病之調查研究	康淑惠	臺灣大學	公共衛生研究所	
2 2000	日本帝國發展下殖民地台灣的人種衛生	范燕秋	國立政治大學	歷史學系	52
3 2001	近代台灣的癩病與療養—以樂生療養院為主軸	陳威彬	國立清華大學	歷史研究所	26
4 2004	身心障礙全球化反思—以樂山療養院為例的歷史結構分析	李弘喆	東吳大學	社會學系	7
5 2006	監獄或家?—台灣癩病患者的隔離生涯與自我重建	陳欽怡	國立清華大學	社會學研究所	15
6 2006	身心的烙印—被邊緣化癩病病患生命意義之探討	王怡乃	靜宜大學	青少年兒童學系	14
7 2006	「遺忘的國度」—樂生療養院紀錄片製作流程研析	駱俊嘉	世新大學	廣播電視電影學研究所	15
8 2006	樂生療養院院民面對搬遷政策的主體性研究	潘佩君	國立陽明大學	衛生福利研究所	11
9 2007	全球視野看癩瘋隔離制度與台灣樂生院運動	賴澤君	臺灣大學	建築與城鄉研究所	
10 2007	臺灣癩病機構之研究—以私立樂山園為例 (1928~1992)	周忠彥	國立中央大學	歷史研究所	0
11 2007	公益原則與財富最大化：從法律經濟分析觀點論樂生療養院抗爭事件	陳尹暉	輔仁大學	財經法律學系	3
12 2007	爭議性公共建設中之多元價值模型—以1993~2006年樂生院相關報紙報導為例	劉國暉	銘傳大學	媒體空間設計研究所	3
13 2007	樂生願—台灣漢生病患的家園保衛戰	鐘聖雄	臺灣大學	新聞研究所	5
14 2007	佛教信仰者生病經驗之研究—以樂生療養院癩瘋病個案為例	林玉燕	南華大學	生死學研究所	11
15 2007	當「我們」同在一起—參與樂生反迫遷抗爭歷程的實踐與反思	張馨文	國立陽明大學	衛生福利研究所	10
16 2007	樂生故事—樂生院拆遷抗爭中的敘事、主體與抵抗政治	黃詠光	臺灣大學	建築與城鄉研究所	9
17 2008	以閒逛者之眼論樂生療養院的集體空間記憶	呂方妮	東吳大學	社會學系	6
18 2008	Web 2.0下的社會運動：以樂生保留運動為例	李明炫	世新大學	新聞學研究所	12
19 2008	弱勢團體在政策制訂過程中的角色研究—以樂生療養院拆遷為例	李佳芸	國立臺北大學	公共行政暨政策學系	0
20 2008	議題催化與議題回應策略研究：樂生療養院拆遷議題之文本分析	楊慧瑛	世新大學	公共關係暨廣告學研究所	7
21 2008	文明化下的被犧牲者—以拍攝「時間的囚籠—樂生療養院」為例	楊仁佐	國立臺灣藝術大學	音像紀錄研究所	0
22 2008	學生社會運動議題倡議策略之研究—以青年樂生聯盟推動「保留樂生療養院」議題為例	朱慕涵	國立臺灣師範大學	大眾傳播研究所	3
23 2009	公民新聞的網路實踐—以樂生療養院事件為例	黃哲斌	國立政治大學	新聞研究所	7
24 2009	樂生心靈地圖：我們之中的癩血	陳潔皓	臺北市立教育大學	視覺藝術學系	0
25 2009	樂生事件發展歷程之探討：路徑依賴觀點	江慧萍	淡江大學	公共行政學系	1
26 2009	挑戰捷運：橋頭糖廠與樂生療養院的保存運動比較研究	洪苑菱	南華大學	應用社會學系	2
27 2009	由都市設計「遠景」與「機制」觀點—探討樂生療養院事件之爭議	鄭志敏	國立成功大學	都市計劃學系	0
28 2010	居於樂生院：從隔離醫療空間到一個安老的家	林育如	中原大學	文化資產研究所	0
29 2010	從「痛苦」邁向「重生」的過程—與樂生院民交流採訪過程中所看見的「生命力」	志村理子	東海大學	日本語文學系	0
30 2010	重思治理術與日常生活實踐：以樂生/新莊對立語境為例	姚耀婷	臺灣大學	地理環境資源學研究所	1
31 2010	門陣挺樂生!? 青年樂生聯盟與台灣人權促進會團體關係之演變	汪芷芸	國立臺北大學	社會學系	0
32 2010	樂生保留運動之影像實踐—以「樂生劫運」為例談影像資料庫的建置與詮釋	平烈浩	國立臺南藝術大學	音像紀錄研究所	2
33 2011	權力與抵抗—樂生療養院強制隔離時期(1945-1962)論述分析	沈雅雯	東吳大學	政治學系	4
34 2011	歷史空間之保存—以樂生療養院事件為例	林倚如	國立臺北科技大學	建築與都市設計研究所	0
35 2011	台灣公民新聞崛起對公共政策之衝擊--從樂生、大埔到反國光石化事件之比較分析	莊豐嘉	臺灣大學	政治學研究所	3
36 2012	論漢生病患之憲法權利保障—以樂生療養院原院保留爭議為中心	陳孟秀	中國文化大學	法律學系	0
37 2012	情感中介的公共性：樂生社區行動的身分政治與互動倫理	游政韋	世新大學	社會發展研究所	0
38 2012	製作歷史、製作博物館：樂生保留運動中的博物館學	鄭靚勤	輔仁大學	博物館學研究所	0

表2 ハンセン病・樂生院関連雑誌論文（国家図書館收藏）年代順

	掲載年/月	論文タイトル	著者名	掲載雑誌（巻・号）	頁
1	1951.12	臺灣癩病防治簡史	賴尚和	臺灣科學 5 : 3 / 4	20-27
2	1961.6	癩瘋病常識-1	胡舜之	衛生雜誌 18 : 11 = 215	25-28
3	1961.7	癩瘋病常識-3	胡舜之	衛生雜誌 19 : 1 = 217	29-30
4	1961.7	癩瘋病常識-4	胡舜之	衛生雜誌 19 : 2 = 218	30-32
5	1961.8	癩瘋病常識-5	胡舜之	衛生雜誌 19 : 3 = 219	26-28
6	1961.8	實用藥物常識(22)—癩瘋病與結核病的化學治療劑	金山	衛生雜誌 19 : 3 = 219	39-42
7	1964.1	樂生療養院—癩病患者的樂園	國防醫學院大眾醫學月刊社編輯室	大眾醫學 14 : 4	122-123
8	1967.11	防治癩瘋病新觀念	游天翔	大眾醫學 18 : 2	57-59
9	1970.7	癩瘋病與精神病犯治療場所之籌設	王雨三	犯罪與矯治學刊 3 : 3	19-23
10	1977.1	現身說法談癩瘋…一位美國癩瘋病患者的經驗	胡舜之	大眾醫學 28 : 1	14-17
11	1979.6	癩瘋病及臺灣省立樂生療養院簡介	社友蘭	大眾醫學 29 : 9	399-402
12	1988.1	癩瘋病的文獻回顧	蔡寶鳳・周碧瑟	公共衛生 15 : 3	328-347
13	1988.4	Relationships Between Oro-Facial Lesions, Mutilations and Periodontal Status in Leprosy Patients at Lo-sheng Sanatorium at Taiwan	王敏瑩・張文魁	臺灣醫學雜誌 87 : 4	437-445
14	1989.2	杏樹下的朋友…癩瘋病	曾小英	幼獅少年 148	74-77
15	1989.3	杏樹下的朋友…癩瘋病	曾小英	幼獅少年 149	72-75
16	1989.1	高屏地區癩瘋病流行病學的探討	蔡寶鳳・周碧瑟	公共衛生 16 : 3	283-300
17	1991.1	國中老師對癩瘋病的知識與態度	蔡寶鳳・周碧瑟	公共衛生 17 : 4	379-388
18	1992.1	國中老師對癩瘋病的知識與態度之相關因素的探討	蔡寶鳳・周碧瑟	公共衛生 18 : 4	335-348
19	1992.8	Autoantibodies and Related Immunity of Leprosy Patients from Leprosarium in Taiwan	王崇任	中華民國微生物及免疫學雜誌 25 : 3	181-188
20	1993.7	Analysis of Factors Related to Treatment and Prognosis of Leprosy Patients in Southern Taiwan	蔡寶鳳・周碧瑟・宋玲娜	中華醫學雜誌 52 : 1	1-8
21	1995.4	明清華南地區有關癩瘋病的民間療法	蔣竹山	大陸雜誌 90 : 4	38-48
22	2001.4	臺灣癩瘋病之父—戴仁壽	陳志宏	經典 33	42-43
23	2001.6	認識癩病	謝楠光	基層醫學 16 : 6	143-148
24	2001.1	醫學與殖民主義	Arnold, David J. 著 蔣竹山譯	當代 52 = 170	40-59
25	2002.5	醫好十位癩瘋患者之記事（路加17：11-19）中上帝國的神學意義	泰明盛	玉山神學院學報 9	1-9
26	2002.8	說起樂生療養院	黃龍德	文化新莊 9	23-26
27	2003.7	癩病園裡的異鄉人：戴仁壽與臺灣醫療宣教	王文基	古今論衡 9	115-124
28	2003.9	十九世紀後期英國醫學界對中國癩瘋病情的調查研究	李尚仁	中央研究院歷史語言研究所集刊 74 : 3	445-506
29	2004.2	中華民國臺灣與國際癩（癩瘋）病防治史	謝楠光	臺灣醫界 47 : 2	39-42
30	2004.2	佛教徒與癩瘋病	戴愛蓮作 林美珠譯	人籟雜誌 2	38-41
31	2004.6	樂生院的哀歌	鄭先祐	Taiwan News 財經、文化周刊 137	81
32	2004.7	臺灣公共衛生的一顆明珠—行政院衛生署樂生療養院	翁文啓	文化新莊 11	15-21
33	2004.9	癩瘋病研究的先驅—漢生 [Gerhard Henrik Armauer Hansen] 醫師	鐘金湯・劉仲康	科學發展月刊 381	42-47
34	2004.12	醫療文化的珍貴資產—新莊市署立樂生療養院	潘佩君	文化視窗 70	92-95
35	2005.3	臺灣社會福利發展—日治時代社會福利機構的歷史探討	陳燕禎	社區發展季刊 109	226-244

掲載年/月	論文タイトル	著者名	掲載雑誌(巻・号)	頁	
36	2005. 3	向癩瘋病友學習	林永明	人癩雜誌 14	7
37	2005. 4	為樂生療養院留一線生機	李永展	Taiwan News 財經、文化周刊 180	68-69
38	2005. 6	谷寒松神父、丁德貞修女 一生奉獻癩瘋病患	楊永智	Taiwan News 財經、文化周刊 188	78-81
39	2005. 10	Leprosy in the Department of Dermatology, Chang Gung Memorial at Kaohsiung from 1988 to 2004 : A Clinical and Histopathologic Study of 13 Cases	王振宇·黃柏翰·鄭裕文·何宜承·陳文杰	長庚醫學 28 : 10	716-723
40	2005. 12	全球化時代的文化遺產—古蹟保存理論之批判性回顧	顏亮一	地理學報 42	1-24
41	2006. 6	樂生療養院員工眷村與我	賴麟徵	臺灣風物 56 : 2	9-41
42	2007. 3	被遺亡的社會角落—癩病病例報告與討論	黃奕彰·劉文信·洪嘉惠·陳俊成·許國忠	基層醫學 22 : 3	105-111
43	2007春	守護樂生院的園丁	陳欽怡	看守臺灣 9 : 1	54-56
44	2007. 5	我支持樂生院的保留	賴其萬	健康世界 257 = 377	85-86
45	2007. 5	人權在你的身上不存在?—樂生院民的過去與現在	陳孟秀	全國律師 11 : 5	5-21
46	2007. 6	從樂生療養院保留運動談起—論新文化資產保存法的問題	何欣潔	典藏今藝術 177	136-137
47	2007. 6	工程至上, 文化靠邊站?—試探樂生療養院保存爭議	游崴	典藏今藝術 177	132-135
48	2007. 6	臺灣樂生療養院國家賠償請求報告	鄭文龍	法律扶助 17	25-28
49	2007. 7	帶一把吉他, 黑手走進樂生院—莊育麟談樂生那卡西	游崴	典藏今藝術 178	130-133
50	2007. 8	另一種轉型正義: 樂生療養院保存運動	邱毓斌	思想 6	1-18
51	2007. 9	樂生院保存技術的討論與評估過程說明	喻肇青·賴澤君	建築師 33 : 9 = 393	94-103
52	2007. 9	「樂生院」—臺灣重要世界文化資產的價值	劉可強·陳育貞	建築師 33 : 9 = 393	88-93
53	2007. 11	這裡叫「樂生」!—一記森小訪樂生療養院	林佳樺	人本教育札記 221	90-93
54	2007. 12	Laying out a Model Village : George Gushue-Taylor and Missionary Leprosy Work in Colonial Taiwan	王文基	East Asian Science, Technology and Society 1 : 1	111-133
55	2008. 2	漢森氏病 Hansen's Disease (癩瘋病)	林彥卿	臺灣醫界 51 : 2	58-61
56	2008. 3	由「樂生事件」論教師公民參與之信念與實踐及其對教育工作的影響	許焜發	教育實踐與研究 21 : 1	1-31
57	2008. 3	漢生病病人補償條例草案之法制研析	趙俊祥·李郁強	國會月刊 36 : 3 = 419	83-110
58	2008. 8	從醫界看早期臺灣與歐美的交流(18) - Dr. George Gushue-Taylor (戴仁壽醫師): 2. 照顧臺灣的癩瘋病人	朱真一	臺灣醫界 51 : 8	56-60
59	2008. 9	從新莊樂生療養院事件看臺灣都市文化資產保存機制之缺失	許肇源·連哲民·黃柏璋	都市與計劃 35 : 3	269-289
60	2008. 10	樂生療養院公共藝術置案—家系列作品	林昭慶	公共藝術簡訊 85	10-11
61	2008. 12	癩病療養所與患者身分的建構: 日治時代臺灣的癩病社會史	范燕秋	臺灣史研究 15 : 4	87-120
62	2009. 3	隔離與調查—樂生院與日治臺灣的癩病醫學研究	王文基·王珮榮	新史學 20 : 1	61-123
63	2009. 6	作為地方社群的樂生院	李采蓉	人類與文化 39/40	40-61
64	2009. 6	朝向域外之思—港千尋、岡部昌生在樂生院的臨界牽拓與歷史翻褶	蔣伯欣	藝術家 68 : 6 = 409	210-213
65	2009. 6	臺灣經濟與人權發展之辦證關係—以漢生病病患為例	李有容	臺灣民主 6 : 2	169-209
66	2009. 12	臺灣的美援醫療、防癩政策變動與患者人權問題, 1945至1960年代	范燕秋	臺灣史研究 16 : 4	115-160
67	2010. 3	Incidentally Discovered Relapse of Leprosy in a Burned Patient with 30 Years after Completion of Therapy	張簡志炫	臺灣整形外科醫學會雜誌 19 : 1	72-77
68	2010. 4	資料庫作為一種記錄方式—以《樂生劫運v2.0》及其影像資料庫為例	井迎瑞	藝術觀點 42	79-83

	掲載年/月	論文タイトル	著者名	掲載雑誌(巻・号)	頁
69	2010. 4	樂生保運運動之影像實踐—影像資料庫的建置與詮釋	平烈浩	藝術觀點 42	74-78
70	2010. 9	樂生事件與新莊捷運線制定之因果關係分析：路徑依賴觀點	陳恆鈞・江慧萍	東吳政治學報 28：3	129-185
71	2010. 9	文化資產審議與政府資訊公開—以請求提供樂生療養院古蹟審查案之相關資料為例	楊佳燕	臺灣博物 29：3 = 107	60-69
72	2010. 12	身障者之再現與發聲：論「樂生博物故事館」之展示建構	陳佳利	臺灣社會研究 80	287-319
73	2011. 3	土地規劃者權力下之民眾參與—以樂生療養院為例	范清益	土地問題研究季刊 10：1	64-74
74	2011. 12	Leprosy and Its Metaphors in Coleridge's "The Rime of the Ancient Mariner"	吳佳玲	語文與國際研究 8	151-169

【日本語文獻】

- 助昭三 (2011)「日本のハンセン病政策と医師、医学界の責任」(日本科学者会議編『日本の科学者』Vol.46 No.1 通巻516号)
- 飯島渉 (2000)「日本の台湾統治と腺ペスト・マラリア」(『ペストと近代中国』研文出版)
- (2001)「近代日本の熱帯医学と開拓医学」(見市雅俊他編『疾病・開発・帝国医療』東京大学出版会)
- (2005)「日本の台湾統治とマラリア」(近代日本の衛生学と植民地医学・帝国医療) (『マラリアと帝国』(東京大学出版会))
- 和泉眞蔵 (2005)『医者への僕にハンセン病が教えてくれたこと』(シービーアール)
- 小田滋 (2010)『増補版』堀内・小田家三代百年の台湾』(近代文藝社)
- 小田俊郎 (1974)『台湾医学五十年』(医学書院)
- 小高健 (1992)『傳染病研究所』(学会出版センター)
- 大友昌子 (2007)『帝国日本の植民地社会事業政策研究』(ミネルヴァ書房)
- 杵淵義房 (1940)『臺灣社会事業史』(南天書局有限公司) 1991年復刻版
- 犀川一夫 (1989)『門は開かれて：らい医の悲願—四十年の道』(みすず書房)
- (1996)『ハンセン病医療ひとすじ』(岩波書店)
- 清水寛 (2001)「植民地台湾におけるハンセン病政策とその実態」(近現代資料刊行会『植民地社会事業関係資料集(台湾編)』別冊)
- 清水寛・平田勝政編 (2005)「台湾におけるハンセン病政策／解説」(『近現代日本ハンセン病問題資料集』補巻7 不二出版)
- 鐘家新 (2010)「内務省の台湾統治：後藤新平による実践と批判」(副田義也編『内務省の歴史社会学』東京大学出版会)
- 城本のみ (2011)「台湾のハンセン病政策に関する覚書き～樂生療養院設立の時代的背景～」弘前大学人文学部『人文社会論叢』(社会科学篇) 第26号
- 芹澤良子 (2007)「ハンセン病医療をめぐる政策と伝道：日本統治期台湾における事例から」(歴史学研究会編『歴史学研究』834号)
- 鶴見祐輔 (1943)『後藤新平傳』臺灣統治篇上・下 (太平洋協會出版部)
- (1965)『後藤新平』第2巻 (勁草書房)
- (2005)『正伝・後藤新平3』台湾時代 (1898～1906) (藤原書店)
- 寺島萬里子 (2011)『韓国・台湾のハンセン病』(皓星社)
- 永岡正己総合監修 (2000)『植民地社会事業関係資料集(台湾編)』(近現代資料刊行会)
- 長木大三 (1989) 増補『北里柴三郎とその一門』(慶応義塾大学出版会)
- 中島利郎編 (2000)『台湾民報・台湾新民報』総合目録1・2 (緑蔭書房)
- 野島泰治 (1973)『祈る：らい医師の海外紀行』(野島富美発行 非売品：国立ハンセン病資料館所蔵)
- 平田勝政 (2006)「日本の植民地下台湾におけるハンセン病問題資料目録」(長崎大学教育学部紀要『教育科学』第70号)

- (2009)「1920年代の台湾におけるハンセン病問題に関する研究」(長崎大学学術研究成果リポジトリ
<http://naosite.lb.nagasaki-u.ac.jp/>『研究論文集—教育系・文系の九州地区国立大学官連携論文集
2009, vol.2, no.2』掲載論文)
- 藤野豊 (2010)『戦争とハンセン病』(吉川弘文館)
- 八重樫信之 (2006)『絆～「らい予防法」の傷痕—日本・韓国・台湾』(人間と歴史社)
- 矢内原忠雄 (1988)『帝国主義下の台湾』(岩波書店)
- 劉士永 (2001)「台湾における植民地医学の形成とその特質」(見市雅俊他編『疾病・開発・帝国医療』東京大学
出版会)
- 若林正文 (2001)『矢内原忠雄「帝国主義下の台湾」精読』(岩波書店)

[中国語文献]

- 北部台湾基督長老教會大會・北部台湾基督長老教會史蹟委員會 (2012)『馬偕日記』I～III (玉山社)
- 陳文榮 (2005)『臺灣癩瘋病救助之父：戴仁壽小傳』(臺北縣政府文化局出版)
- 陳永興 (1997)『台灣醫療發展史』(新自然主義股份公司)
- 董英義・陳秀麗 (2010)『台灣癩病患者守護天使—戴仁壽醫師傳』(財團法人台灣基督長老教會台灣教會弘報社)
- 范燕秋 (2005)『疫病・醫學與殖民現代性—日治臺灣醫學史』(稻鄉出版社)
- (2009)「癩病療養所與患者身分的建構：日治時代臺灣的癩病社會史」(中央研究院臺灣史研究所『臺灣史
研究』第15卷 第4期)
- (2010)「臺灣的美援醫療、防癩政策變動與患者人權問題，1945至1960年代」(國立臺灣師範大學臺灣史研
究所『東亞近代漢生病政策與醫療人權國際研討會論文集』)
- 樂生療養院口述歷史小組 (2011)『樂生—頂坡角一四五號的人們』(聯誼書報社)
- 劉集成 (2004)『樂生療養院志』(臺北縣政府)
- 林家承・李幸玲・楊依捷・周妤珊・朱光弘・李長偉 (2008)『再見樂生』(玄奘大學新聞學系)
- 潘佩君 (2010)「樂生療養院院民近期搬遷問題—從漢生病人的生命經歷談起」(國立臺灣師範大學臺灣史研究所『東
亞近代漢生病政策與醫療人權國際研討會論文集』)
- 臺北縣政府文化局 (2006)『行政院衛生署樂生療養院擴大調查研究—訪談記錄暨照片測繪圖集』
- (2010)『行政院衛生署樂生療養院拆遷工程施工記錄』
- 王文基 (2003)「癩病園裡的異鄉人：戴仁壽與臺灣醫療宣教」(『古今論衡』第9期)
- 王文基・王珮榮 (2009)「隔離與調查—樂生院與日治臺灣的癩病醫學研究」(『新史學』20卷1期)
- 吳文星 (2008)『日治時期臺灣的社會領導階層』(五南圖書出版)
- 行政院衛生署樂生療養院HP <http://www.lslp.doh.gov.tw/>
- 葉永文 (2006)『台灣醫療發展史—醫政關係』(洪葉文化事業有限公司)
- 張蒼松 (2006)『解放天刑』(臺北縣政府文化局)
- 張平宜 (2004)『悲歡樂生』(中華希望之翼服務協會)
- 鄭志敏 (2004)『日治時期《臺灣民報》醫藥衛生史料輯』(國立中國醫藥研究所)
- (2005)『杜聰明與臺灣醫療史之研究』(國立中國醫藥研究所)
- 莊永明 (1998)『台灣醫療史—以台大醫院為主軸』(遠流出版)